

1920年代上海における 日本人作家の視点と世界観の変容

芥川龍之介と横光利一の比較研究

顧思思

1. 研究背景と問題提起

1840年のアヘン戦争で中国が敗れた後、東アジア諸国は欧米列強の危機にさらされ、日本は生き残る道を求めて開国を余儀なくされた。江戸幕府の終わりから建国、そして明治維新の間、日本は、内政面では王政復古による国家の統一、外政面では中国や欧米の力を測る必要があり、既成の秩序を変えなければならないというジレンマに、内外で直面した。19世紀から20世紀初頭、欧米列強が経済的搾取を目的とした「第一次グローバリゼーション」を推進する中、日本人は国際関係の中で自らを再認識し始め、世界観に変化をもたらした。

日本の世界観については、江戸時代後期（1750年頃～1850年頃）に学界がすでに儒学、蘭学、国学に分かれていた。これは当時の日本の知識人が日本、中国、その他の外界（西洋）を認めていたことを意味している。

日本における儒教は政治システムの一部として吸収され、日本で公職に就くために必須の学問となった。表面的には、儒教は日本で非常に人気があるように見えたが、実際には封建制度を支える道徳的な役割しか果たしていなかった。

このような状況の中で、日本人が日本固有の独自の文化について考察する中で、国学が生まれた。18世紀半ばになると、儒教や仏教が伝来する以前から日本に存在していた独自の思想を探求するために、国学が盛んになった。初期の国学は、日本の古典的な書物を自由に研究していたため、現実に対して批判的であった。後期には、神道思想が儒教や仏教の影響を排し、日本を中心とした復古主義、排斥的な攘夷思想に発展していった。

蘭学は、当時唯一日本と通商関係のあったオランダからの洋学であった。蘭学は医学などの実用的な学問の導入に始まり、天文学や土地測量学などの西洋の学問、さらに歴史学や経済学、政治学などの書物の翻訳が行われ、武士階級に当時の封建制度への疑問を抱かせた。

これら3つの教義のうち、儒教は公的な統治手段として政府から高く評価されていたため、上流階級は中国語の教育をかなり受けていた。そのため、日本と中国の文化的背景には多くの共通点があったと言える。当時の日本には、中国が世界の中心であるという世界観があったと考えられている。

明治以降、「東アジア」という言葉が徐々に認知されるようになった。これは、日本人が自分たちの「地域」を再発見したことを意味する。自分たちの地域を再発見した後、日本は欧米との関係を調整することによって、東アジアという「地域」の中で自国の地位をどのように維持できるかが問題となった。明治以降の日本の世界観は、中国文化圏の中の一国としての日本、旧宗主国としての中国、そして新たに登場した欧米列強の間にポジションを見出すことであった。

この時期の日本は、中国との関係を特に重要なものとし、明治以降の「近代化」の過程で、常に中国と比較しながら、自らの立ち位置を探っていた。多くの日本人が中国各地を

旅し、中国の地で中国人と生活を共にし、異国や異文化に触れることで、無意識のうちに自らの存在や考え方を振り返り、自らを見つめ直す機会を得た。

第二次世界大戦以前、中国に定住した日本人は、定住地として、上海、満州、天津、漢口、厦門、蘇州、杭州、沙市、福州、重慶などを選んだ。当時、これらの場所には日本の租借地または一種の占領地があったが、その中でも上海は他とは異なる特徴を持つことから、重要な地位を占める都市であった。

上海の特殊性として、第一に国際性が挙げられる。上海の都市にはイギリス租界、フランス租界など、50もの国籍の人々が中国という「国の中の国」に住んでいた。上海は各国の意図が複雑に入り組む場所であった。上海租界（シャンハイそかい）とは、1842年の南京条約により開港した上海に設定された租界（外国人居留地）を指す。当初、イギリスとアメリカ合衆国、フランスがそれぞれ租界を設定し、後に英米列強と日本の租界を纏めた共同租界と、フランスのフランス租界に再編された。上海租界はこれらの租界の総称である。「華界」とは、フランス租界とイギリス租界に挟まれた、主に中国人が居住する地域を指す。第二に、国際的な大都市として、その政治面のダイナミズム、経済面の繁栄はいずれも他の都市を大きく引き離している点が挙げられる。第一次世界大戦後、上海は軽工業と貿易を中心に急成長を遂げ、ニューヨーク、ロンドン、パリと並ぶ世界の大都市となった。上海は宗主国中国の利害と諸外国の利害が混在する環境であったことから、租界に住む日本人も、生粋の日本人も、上海を全世界の縮図として見ていたのである。

このような特徴を持つ都市に、19世紀後半、日本が外国勢力として参入してきた。1843年の開港、1845年の英国租界設置以来の租界全体の歴史から見ると、租界の日本人は後発移民であった。しかし、上海は日本から最も近い国際大都市であるため、日本人、特に長崎県に住む人にとっては、「長崎県上海市」という言い方があるぐらい、上海に行くのは東京に行くよりも非常に近く感じられるものであった。1923年、日本郵船の中日連絡ルートが設立され、日本人が上海に行く際にはパスポートも不要であったことから、上海への旅行者が明らかに増加した。

上海に来た日本人は、天皇を中心とする中央集権化、国民皆兵の軍国化、急性資本主義化といった急速な近代化が進む社会において、海外に自らの発展の場を求めようとする知識人も多くいた。

劉（2006）は明治時代以降に上海にやってきた知識人の著作を分析し、上海が日本人にどのような役割を果たしたかを解説している。劉（2006）は、日本人の目に映る上海には、当時の西洋の高度な文明とその資本主義を体現した租界と、当時の中国の立ち遅れを体現していた華界という2つの空間が存在していたことを主張している。その裏付けとして、劉（2006）は次のように述べている。まず、明治初期の日本人の視線は西洋の租界を体現することに集中し、華界の立ち遅れを批判していた。だが、明治時代後期になると永井久一郎のような日本の知識人が水郷としての上海を再発見した。大正時代には、旅行業界の新興に伴い、多くの日本人作家が次々と上海を訪れ、上海に様々な文化があることを見ていた。しかし、1932年に「1.28事変」が発生した後、直木三十五が見たように、上海はすでに日本軍国の侵略の目標地となっており、租界や華界のような視線はなかった。

このように、劉（2006）は、日本と日本人に対する上海の役割について、明治政府が推進した近代国家の本質を踏まえ、時間を明治時代以前と以後に分け、さらに明治以後を分析する際に、日本の知識人が租界と華界をどのように捉えたかを焦点としている。さらに、劉は日本人知識人の視点から「魔都」の形成に焦点を当てている。上海が租界に指定された1840年代から始まり、欧米列強に侵略された後の上海の二面性を検証し、その二面性から上海の近代化の過程を観察した。

だが、劉（2006）は、都市の二重性を手がかりに、日本人知識人の上海観察に焦点を当てているため、上海で自己の位置づけを求めた日本人知識人という切り口には触れていない。当時、上海にやってきた日本人知識人たちは、それぞれ異なる背景を持ちながらも、国内での行き詰まりから、海外で自らを發展させるという共通の目的をもっていたと考えられる。後述するが、大阪毎日新聞の特派員として上海に渡った芥川龍之介は、上海に来る前年の大正9年、自分のスタイルを変えるという問題に直面している。また、横光利一は上海に行く前から創作のジレンマに陥っており、この状況を打開したいと考えていた。上海に来て直面したのは、イギリス商人が築いた租界であり、東洋の空間に西洋があり、西洋だけでなく中国と日本が入り混じっていた様子であった。そして、自分たちが属していたコミュニティやそのスペースを離れたとき、彼らは日本にはなかった多様性に直面することになり、上海に何を求めていたのかを文章で表現したのである。

劉の研究は、租界と租界に対して、日本人がどう考えていたかを明らかにしたことは意義深い。だが、日本の知識人が閉じられた空間である日本を離れ、異国の地で再び自らの立ち位置を見出す「自己位置付け」がどのようなものであったかはわからない。

そこで本研究は、当時の日本の知識人は上海で何を見て、何を考え、自分たち日本人のアイデンティティに対する位置づけが全世界でどのように変化したのかについて検討する。これを検討することは、日本の知識人の視点から上海を見るだけでなく、当時の日本や日本人にとっての上海の意義を探る機会を提供することができる。

当時、中国を旅した日本人の中には、谷崎潤一郎、芥川龍之介、横光日出吉、金子光晴、武田泰淳、林京子、井上ひさしなど、多くの近現代作家も多くいた。この中で、本研究は、芥川龍之介と横光利一に着目する。

日本の大正文壇を代表する作家の一人である芥川龍之介は、その短い生涯に200を超える短編の名作を後世に残した。後に創設された芥川文学賞は、現在でも日本文学界で最も重要な純文学賞とされている。芥川は大阪毎日新聞の特派記者として、上海から北京に渡った。帰国後、病気にもかかわらず、いくつかの雑誌に体験記を連載し、それを『支那遊記』という本にまとめた。当時、中国に渡った作家は少なくなかったが、著作を発表した作家は少ない。その中でも、『支那遊記』は『上海遊記』が21章とかなりの部分を占めており、当時の中国を研究する上で重要な資料である。

横光利一は日本の新感覚派の先駆者であり、昭和文壇代表する作家である。横光は3度に渡り、中国に行っている。横光は『静安寺の碑文』の中で、「私に上海を見て来いと云った人は芥川龍之介氏である。氏は亡くなられた年、君は上海を見ておかねばならないと云はれたのでその翌年上海に渡ってみた。」（1937/10）と述べているように、芥川の影響を受けて上海を訪れたことを明かしている。

横光の初めての中国行は、芥川が自殺した翌年の1928年4月で、上海に1ヶ月ほど滞在した。その後、1928年11月から1931年11月まで雑誌『改造』に「風呂と銀行」「足と正義」「掃の疑問」「持病と弾丸」「海港章」「婦人一海港章」「春婦一海港章」というタイトルで旅行記を発表し、『文学クオタリイ』に発表した「午前」を加え改稿したものを、1932（昭和7）年に改造社から横光の最初の長編小説として『上海』として刊行した。この本は、新感性派の最高峰として、また横光の創作スタイルの転換点における傑作として位置づけられており、横光の文学研究史上、非常に重要な位置を占めていると言える。

芥川と横光はともに1920年代の上海を経験していることから、彼らの作品を比較することで、1920年代の上海が日本文学の中でどのように形成されたかを窺い知ることができるであろう。

本論文では、芥川龍之介の『支那遊記』の上海紀行部分と横光利一の『上海』を比較することで、日本人作家の目に映った1920年代の上海の印象と、それが日本人の世界観の変化に与えた影響を探る。特に、本論文では、日本人と上海の関係を検証するとともに、日本の作家が描いた国際都市としての上海のイメージを分析し、当時の日本人の上海理解の諸相を明らかにする。

第2章では、日本人作家が1920年代の上海をどのように描いたかを考察するために、芥川龍之介の『支那遊記』の上海紀行部分を検討する。まず、芥川が上海で体験した出来事や観察を詳細に取り上げ、彼の視点から見た上海の都市風景や人々の生活を分析する。その上で、芥川の上海に対する印象が彼の文学作品や思想にどのような影響を与えたかを明らかにする。

第3章で、横光利一の小説『上海』は、1930年代の上海が国際的な都市としてどのような複雑な姿を示していたかを探究する。この章は、小説の主要人物が生活する租界内の複雑な人間関係や道徳観念の退廃を通じて、上海が抱える多様性と矛盾を浮き彫りにする。

第4章では、芥川龍之介の『上海遊記』と横光利一の『上海』を比較し、1920年代の上海が日本人作家に与えた印象と、その影響について考察する。まず、芥川と横光が描いた日本人と上海の関係を分析し、次に国際都市としての上海のイメージを探る。最後に、両作家の上海理解の諸相を検討する。

2. 芥川龍之介『上海遊記』の中の上海

第2章の構成は以下の通りである。まず、2.1節では芥川の上海訪問の背景とその目的を述べる。次に、2.2節では芥川の『支那遊記』から上海紀行の具体的な記述を引用し、彼の観察や感想を分析する。さらに、2.3節では芥川の上海体験が彼の文学にどのように反映されたかを検証し、特に彼の世界観の変化について論じる。最後に、2.4節では芥川にとっての上海理解の諸相を考察する。

2.1 『上海遊記』について

後の分析部分を明確にするために、『上海遊記』の内容について簡単に説明する。

『上海遊記』は次の二十一小節からなっている。すなわち、「一、海上」、「二、第一瞥(上)」、「三、第一瞥(中)」、「四、第一瞥(下)」、「六、城内(上)」、「七、城内(中)」、「八、城内(下)」、「九、戯台(上)」、「十、戯台(下)」、「十一、章炳麟(しようびょうりん)氏」、「十二、西洋」、「十三、鄭孝胥(ていこうしよう)氏」、「十四、罪悪」、「十五、南国美人(上)」、「十六、南国美人(中)」、「十七、南国美人(下)」、「十八、李人傑氏」、「十九、日本人」、「二十、徐家匯」、「二十一、最後の第一瞥」である。

「一、海上」は上海行きの船で、嵐で船酔いしたことからは始まる。「二、第一瞥(上)」は上海到着後の宿泊状況を書いている。「三、第一瞥(中)」は初日の夜の食事と食後のショッピングを、「四、第一瞥(下)」は喫茶店と花売りの老婆を、「五病院」は病院での生活を描いている。「六、城内(上)」は城内の小さな店と湖心亭を描いたものである。「七、城内(中)」は城内で見かけた乞食や骨董品店について書き、「八、城内(下)」は寺の人形や鳥を売っている様子を書いている。「九、戯台(上)」は天蟾舞台を書き、「十、戯台(下)」は中国演劇の特徴、新劇の象徴性を述べ、俳優の緑牡丹に言及している。「十一、章炳麟氏」は章炳麟氏に出会ったことを記述し、「十二、西洋」は上海で見た西洋を記述している。「十三、鄭孝胥先生」は鄭孝胥氏に会ったことを記述し、「十四、罪悪」は殺人、売春、阿片、不真面目な西洋人を描いている。『十五、南国美人(上)』は居酒屋、売春婦呼

びの順番、愛春を描いている。「十六、南国の美人(中)」は時鴻、洛娥、天竺、秦楼、梅逢春を描き、「十七、南国の美人(下)」は美女経、遊女館、花宝玉を語っている。「十八、李人傑氏」李人傑氏との会見についての記述し、「十九、日本人」は租界に住む日本人の同胞意識を述べ、「二十、徐家匯」は上海のキリスト教に関する三つのエピソードを述べている「二十一、最後の一瞥」は上海を出発する船上で上海を回想する様子を描いている。

本章では、芥川龍之介が上海に行く前の状況、『上海遊記』における日本人と上海との関係、芥川龍之介が見た上海の三つの側面から分析する。この分析を踏まえ、芥川龍之介が『上海遊記』を通じて当時の上海について理解したこと、そしてこの旅が彼に与えた影響を最終的にまとめる。

1.

2. 1. 1 『上海遊記』の背景

芥川が中国訪問に対して何を期待し、なぜ目指すことにしたのかを明らかにするために、「上海遊記」の分析に先立ち、旅行を開始する前の芥川のライフスタイルや創造力に関する困難など、芥川龍之介の中国訪問、特に上海行程の背景について述べる。

次に、「上海遊記」の分析に必要な背景と文脈を提供し、作品の成り立ちと意義をより深く理解させるために、芥川龍之介が旅行途中で直面した予想外の病、長期滞在などについて詳述する。これによって、病や滞在経験が芥川の創作スタイルや中国旅行への展望をどのように変えたかを明らかにする。

投稿前と渡航後の2つの時期を比較することで、芥川龍之介が中国へ赴く多様な動機や期待、彼が上海で体験した一連の出来事が人生や創作観念にどのように影響を与え、それを形成したかを究明し明らかにする。

2. 1. 2 中国へ行く前に

芥川龍之介の中国への旅行は大正10年(1921年)三月下旬から七月中旬にかけて行われた。先述したように、芥川龍之介は、中国に旅立つ直前の大正8年から9年(1919年-1920年)、創作スタイルの転換に直面していた。また、ほぼ同じ時期に、私生活でも悩みに直面していた。以下では、これら2つの側面から、芥川龍之介が中国へ向かう前に直面した困難について詳細に論じ、彼の中国行に対する目的を推測する。

芥川龍之介は夏目漱石によって発掘された作家である。同人雑誌『新思潮』の創刊号で芥川龍之介が「子」を発表し、夏目漱石がこの作品を絶賛したことがきっかけとなり、芥川龍之介は文壇で新進作家の地位を築くことができた。夏目漱石が『三四郎』、『門』などの作品を執筆した明治四十年代は、自然主義文学が全盛期にあった。日本の自然主義は、田山花袋の『被褥』(1907年)、島崎藤村の『家』(1910年-1911年)など、作家自身の経験から作品の素材を見出し、赤裸々に作家の実際の生活を描写する傾向があった。この創造的態度から文学価値観が生まれ、「私小説」のスタイルが開拓された。しかし、夏目漱石の文学は正反対であり、常に想像力で架空の世界を構築していた。夏目漱石はこの架空の現実以上の真実感を与えることができ、厳粛な小説の手法を徹底的に堅持した。芥川龍之介は自らの文学道を歩み始めると、自分の生活を告白するような「私小説」タイプの文学は書かなくなった。同時に、夏目漱石に評価された新人作家として、芥川龍之介は短編小説で虚構の文学手法を堅実に受け継いだ。

芥川龍之介の独自の芸術観は、「地獄変」(1918年)における「芸術至上主義」の芸術観に展開している。『地獄変』は芥川龍之介が「地獄」をテーマに、西洋の神性や特色、色彩を巧みに東洋の芸術表現方法に取り入れ、魅力的な架空の世界を創造した。本書で芥川は芸術至上主義の理念を説明した。つまり、芸術家の「真の人生」は彼らの創作過程の

中にのみ存在し、その価値の追求は日常生活の些事を超えなければならないということを主張した。「芸術至上主義」は、実際の人生を捨て、芸術行為を絶対的な価値とみなす考え方である。「芸術至上主義」は芸術家が生活の些事や困難を避けて、芸術創作に集中するのを助けるかもしれない。だが、この考え方は芸術家を現実から遠ざけ、作品に現実を正確に反映させることができなくなる可能性がある。そのため、芸術上の固定観念に陥っていると感じていた芥川龍之介は、大正8年から9年(1919年-1920年)にかけて作品スタイルを転換した。『秋天』(1920年)では、歴史的なテーマから現代的なテーマに切り替えようと試みたが、この作品はあまり成功せず、打ち切られた。

ほぼ同じ時期に、芥川龍之介の私生活も困難に直面していた。大正8年から9年にかけて、芥川龍之介はしげことの間に不倫関係があった。大正9年3月、芥川龍之介の妻文子は長男比呂志を出産した。同時に、しげこも男児を出産している。したがって、芥川龍之介はしげこの子供が自分の子供かどうかを心配していた。この時期の2人の女性の出産を通じて、芥川龍之介は自分の周りに「母親」となった2人の女性がいることに気づいた。この現実が芥川龍之介に、自分と「母親」の関係について再び気づかせた。芥川龍之介の生母は彼を生んだ後、7か月目(あるいは10か月後とも言われる)に狂気に陥り、彼は母親の実家である芥川家に引き取られて育った。狂気に陥った生母、自分が養子である事実を、芥川龍之介は長い間話さずに隠していた。たとえば、彼の実質的な処女作である『大川の水』(1914年)の冒頭部分では、「自分は、大川端に近い町に生まれた。」と書かれているが、「大川端に近い町」とは「家」を指しているが、実際に芥川龍之介が生まれた新原家は築地の外国人居留地の近くにあった。自分の出自を初めて明かした記事では、芥川龍之介は意図的に自分の出生の事実を隠している。また、芥川龍之介の初期の作品には、母親をテーマにした作品が非常に少ない。これは作家の内心に母親への禁忌があることを示唆している。大正9年の作品上の転換点と日常生活上の出来事は、芥川龍之介に初めて母親の狂気の「現実」に直面させた。さらに、芥川龍之介の中国行は彼と谷崎潤一郎の友情にまで遡ることができる。谷崎潤一郎が中国旅行を計画していたことが芥川龍之介に中国への興味を刺激した。同時に、彼は中学時代の友人が中国で働く動向もあったため、中国への旅行を決定するきっかけとなった。また、当時日本では「中国趣味」が流行しており、中国文化は日本の知識人に強力な魅力を持っていた。芥川龍之介は幼い頃から中国の古典詩や文学に深い興味を抱いており、これも彼が中国への旅行に期待を寄せる理由となった。このような背景のもと、芥川龍之介の中国行は大阪毎日新聞社の中国特派員として行われたものであり、彼にとっては新しい環境や経験からインスピレーションを得て解放される機会でもあった。

本来、旅行には機能がある。人が旅行すると、日常生活から解放され、新しい土地を訪れ、通常接触しないことを見る。これらはすべて旅行者が自分の存在を再認識し、日常生活の中での自己の位置を問い直すための刺激ではないだろうか。また、今回の旅行は国内旅行ではなく、当時は上海への航行にビザは必要なかったが、東京から出発すると、長崎人ほど近いとは感じられない、異国の場所である。旅行の環境は、芥川龍之介に自己を解放し、自分の存在を再考する機会になったのではないだろうか。

2.2 中国への出発

芥川龍之介は海外視察員としての任命は新聞社が突然決定したものである。第一次世界大戦後、日本と欧州、アジア諸国との関係がますます密接になり、各新聞社は海外通信欄を充実させようとしていた。さらに、新聞社は作家を海外に派遣し始めた。当時、フランスフランの低価格と日本円の高価格のため、パリに滞在している日本人は非常に多かつ

た。当時、パリにはロシアや東欧からの亡命者や多くのアメリカ人がいた。日本の新聞社は、これらの外国情勢を紹介する記事を発表するために競い合っていた。したがって、記事を書くことに優れた特派員が必要であった。1921年（大正10年）1月4日付の『大阪毎日新聞』には、「本年の本社海外視察員及び留学生」の公告が掲載された。この公告によれば、毎日新聞社は毎年8名の社員を海外に派遣し、その年は10名の社員を外国各地に派遣する予定であった。しかし、この公告のリストには芥川龍之介の名前はなかった。2月10日ごろ、新聞社は芥川龍之介に中国行きの意向があるかどうかを尋ねた。海外視察員になることを決めた後、芥川龍之介は自分の創作スケジュールを調整し、友人たちに中国旅行のことを通知した。毎日新聞社は芥川龍之介の訪華の成果を非常に期待しており、旅行中は毎日記事を書いて日本に送り、発表する予定であった。

3月19日、芥川龍之介は中国を訪れ、滞在予定は1か月だけだった。しかし、出発前の仕事が忙しく、芥川龍之介は風邪をひいてしまい、出発前には1日家で休養していた。しかし、病状は良くなり、3月19日の午後5時半に東京駅を出発した夜行列車の中で、芥川龍之介は発熱し始め、旅程を変更しなければならなかった。彼は大阪で数日休養した後、28日に筑後丸号に乗って上海に向かった。しかし、連続して発熱し、風疹にかかり、船上で嵐に遭遇したため、健康状態の良くない芥川にとっては雪だるま式の悪化となった。そのため、3月30日の午後、上海に到着した直後に芥川龍之介は病気になり、上海の病院で約3週間入院した。この部分は『上海游记』の「五、病院」で次のように述べられている：

私はその翌日から床に就いた。そうしてその又翌日から、里見さんの病院に入院した。病名は何でも乾性の肋膜炎とか云う事だった。仮にも肋膜炎になった以上、折角企てた支那旅行も、一先ず見合せなければならぬかも知れない。そう思うと大いに心細かった。私は早速大阪の社へ、入院したと云う電報を打った。すると社の薄田氏から、「ユックリリョウヨウセヨ」と云う返電があった。しかし一月なり二月なり、病院にはいったぎりだったら、社でも困るのには違いない。私は薄田氏の返電にほっと一先安心しながら、しかも紀行の筆を執るべき私の義務を考えると、愈心細がらずにはいられなかった。

乾性の胸膜炎とは現在の言葉で言えば胸膜炎である。肺膜の膜が炎症を起こす病気で、症状には発熱、呼吸困難、せき、倦怠感、虚汗、胸の痛みなどがあり、胸膜内に滲出液が溜まる湿性胸膜炎と、滲出液がない乾性胸膜炎に分かれる。芥川龍之介がかかったのは後者の一種である。治療には絶対的な安静が必要なので、上海に到着してから2日目から、芥川龍之介はずっとベッドで横になり、何もできなくなった。

『上海游记』における芥川龍之介の病状についての記述部分から、彼自身が自覚症状の重さと臨床的予後（肋膜炎の予後や治療期間）を十分に理解し、その状況から焦燥を深め、悪化していく病症に対する不安感を持っていることが伺える。これは、「折角企てた支那旅行も、一先ず見合せなければならぬかも知れない。そう思うと大いに心細かった。」という表現から読み取れる。ここにある「折角企てた支那旅行」という言葉から、その旅行が彼にとってどれほど重要であったかが伺える。また、「しかし一月なり二月なり、病院にはいったぎりだったら、社でも困るのには違いない。」「しかも紀行の筆を執るべき私の義務を考えると、愈心細がらずにはいられなかった。」という記述からも、彼が自身の責任について強く感じていたことがわかる。これらは、彼の焦燥感を顕著に示している。

さらに、芥川が「私は早速大阪の社へ、入院したと云う電報を打った。すると社の薄田氏から、「ユックリリョウヨウセヨ」と云う返電があった。」と述べている部分から、彼

が自身の健康問題によって他人に迷惑をかけることを考えている。これは、周囲の人への尊重を表しており、その上で深刻な自責感を自覚していることが分かる。上記の記事から、彼の焦燥した気持ちが伝わってくる。

2.2.1 上海のスケジュール

『上海游记』の内容を具体的に分析する前に、芥川龍之介の中国行中で上海のスケジュールを確認する必要がある。大正10年（1921年）3月19日に東京を出発し、同月28日に上海に到着した。その後、彼は上海の病院で約3週間入院し、4月18日に退院した。入院中、彼は彼の体験と観察に基づいて『上海紀行』を書き始めた。4月21日、芥川龍之介は上海で2度目のホテルにチェックインし、病気のため1か月以上にわたって上海に滞在することになった。この滞在中、彼は上海市内や周辺地域を数回訪れ、当時の中国社会についての彼の観察と体験を文にした。

中国行きのスケジュールは非常に短かったが、芥川龍之介は上海の病院で1か月以上過ごし、その間に彼の健康状態は改善された。しかし、彼の旅行は彼の予想したようには進まず、彼は1か月以上も上海に滞在することになった。

2.3 日本人と上海の関係

2.3.1 居留民とのコミュニケーション

芥川龍之介にとって、病院滞在は本当に不幸なことであった。しかし、別の視点から見ると、3週間の入院生活は芥川龍之介にとって上海の居留民の存在を発見する機会を提供したかもしれない。（*居留民とは、居留地に住む外国人のことである。居留地とは国内の一部を限って、外国人の居住・営業のために指定した地域。中国では租界といった本文の居留民は特に1920年代に上海に住んでいた日本人を指す。）その交流は大きいものではなかったかもしれないが、旅行記には里見病院での出来事や居留民との会話が記されており、当初は数日での出発する予定であった芥川龍之介が租界の日本人社会との接触を通じて新たな理解を得たことを示している。

『五、医院』では、芥川龍之介は新聞社の村田、友住、ジョーンズ、西村貞吉など学生時代の友人以外にも、多くの地元の居留民が自分を心配してくれたと述べている。さらに、彼は現地の友人も知り合った。

しかも作家とか何とか云う、多少の虚名を負っていたおかげに、時々未知の御客からも、花だの果物だのを頂戴した。現に一度なぞはビスケットの缶が、聊か処分にも苦しむ位、ずらりと枕頭に並んだりした。（この窮境を救ってくれたのは、やはりわが敬愛する友人知己諸君である。諸君は病人の私から見ると、いずれも不思議な程健啖だった。）いや、そう云う御見舞物を辱くしたばかりじゃない。始は未知の御客だった中にも、何時か互に遠慮のない友達つき合いをする諸君が、二人も三人も出来るようになった。俳人四十起君もその一人である。石黒政吉君もその一人である。上海東方通信社の波多博君もその一人である。

まず、「しかも作家とか何とか云う、多少の虚名を負っていたおかげに、時々未知の御客からも、花だの果物だのを頂戴した。」という引用からは、芥川龍之介が居留民から敬意を表される形で、フルーツや花といった贈り物を頻繁に受け取っていたことが伺える。また、「未知の御客だった中にも、何時か互に遠慮のない友達つき合いをする諸君が、二人も三人も出来るようになった。」という部分も、彼が現地の人々から歓迎され、温かな

人間関係を築いていたことを示している。さらに、続く「俳人四十起君もその一人である。石黒政吉君もその一人である。上海東方通信社の波多博君もその一人である。」は、彼が現地で新しく友人を作ったことを具体的に語っている。これは、彼が現地の文化やコミュニティに少しずつ溶け込んでいった結果と言えるだろう。これらの部分をまとめると、芥川龍之介が上海の居留民から大いに歓迎され、魅力ある共同体の一部となることができたと言える。

次に、『上海遊記』の『十九、日本人』における芥川龍之介の居留民に関する見聞を分析し、芥川が異郷の日本人としての愛国心や帰属意識、そして上海で自分自身が感じた日本人としての内なる意識をどのように感じているかを明らかにする。

『五、医院』の付記には次のように書かれている。

「入院中の事を書いていれば、まだいくらでも書けるかも知れない。が、格別上海なるものに大関係もなさそうだから、これだけにして置こうと思う。唯書き加えて置きたいのは、里見さんが新傾向の俳人だった事である。次手に近什を一つ挙げると、炭をつぎつつ胎動のあるを語る。」

俳句は長い歴史を持つ日本独自の文芸形式で、約俳句という形で繊細な感情や自然の風景を表現する。日本人が海外で生活しているときでも、その文化の一部として俳句を詠むことは、遠く離れた故郷への思い、国への愛国心、そして自分自身が日本人であることへの帰属感を表現する一種の手段となる。芥川龍之介が上海で俳句会を開いていたという事実は、彼が日本の美を順守し、上海のような異なる文化的背景の中で自分の日本人としてのアイデンティティを確認し続けていたことを示している。また、そのような環境で日本の伝統芸術である俳句を詠むことは、自身の日本人としてのアイデンティティを強調し、離れた故郷との精神的な絆を深くすることになる。

また、この文章の中に書かれていない出来事として、芥川龍之介を中心とした俳句会がある。戸田民子（1983）の『芥川龍之介『上海遊記』における里見病院の出来事』によると、芥川龍之介が里見病院で療養している間、彼が注目したのは、島津四十起、大島花、五十嵐飛天楼などの俳人であった。また、大阪毎日新聞社の常駐記者である牧田孜郎も「鳥江」という称号の俳人であった。彼らは『海紅』を中心に創作活動を行っていた。芥川龍之介自身も「俳句以外に特別な趣味はない」と述べている。戸田民子は、里見病院長の義妹である森秋女史を通じて、スーツ姿の芥川龍之介が里見家で頻りに俳句会を開いていることを知った。芥川龍之介は療養しながら俳句の趣味を持つ文人たちと一緒に俳句を創作し、当時、多国籍の人々が集まり複雑な都市だった上海で日本人が日本の伝統的な俳句を創作することが容易ではなかった状況が窺える。それでも俳句を作り続けるのは、芥川龍之介に代表される在上海日本人の祖国に対する愛着と思いを反映している。

こうしたことから、海外で生活する日本人の愛国心が垣間見える。この出来事は小さいかもしれないが、芥川龍之介の上海体験について考える上で重要である。

2.3.2 居留民の民族意識

『三、第一瞥(中)』には、ある日の夜、ジョーンズがバーで見た日本の女性サービス係が登場し、『五、医院』や『十九、日本人』でも病院での出来事が語られている。日本の女性サービス係が登場することは、当時上海に移住してきた人口の中で、このようなサービス業や売春婦が比較的多かった状況を反映しているのかもしれない。

『十九、日本人』には5つの短編が含まれている。最初の話は、上海に住む日本人が桜

を見た時、その桜がどんなにみずぼらしくても、桜を見る人はみんな喜びを感じるというものである。2番目の話は、同文書院を訪れた時、寮の2階から鯉のぼりを見る場面が描かれている。第三の話は、上海日本婦人クラブの招待を受けた際、ある奥様が小説家を間違えており、芥川龍之介の作品を小説だと思って称賛したことが描かれている。第四の話では、日本の売春婦が西洋の男性と一緒にいるのを見て、日本の男性が不快な気持ちになる様子が分析されている。最後の話では、X氏が亡くなった際、芥川龍之介が上海に住んでいたX氏の気持ちを代弁し、遺言としてX氏の遺骨を日本に埋葬するように家族に依頼していた。

この章全体を通して、上海で暮らす日本人の民族意識が描かれている。桜の話では、芥川は皮肉な口調で、上海の日本人が桜を見る際の反応を描写している。

「上海紡績の小島氏の所へ、晩飯に呼ばれて行った時、氏の社宅の前の庭に、小さな桜が植わっていた。すると同行の四十起氏が、「御覧なさい。桜が咲いています。」と云った。その又言い方には不思議な程、嬉しそうな調子がこもっていた。」

このような反応の裏には、上海に住む日本人のホームシックがある。芥川龍之介自身も「この一本の鯉幟は、忽風景を変化させた。私は支那にいるのじゃない。日本にいるのだと云う気になった。」「しかしその窓の側へ行ったら、すぐ目の下の麦畑に、支那の百姓が働いていた。それが何だか私には、怪しからんような気を起させた。私も遠い上海の空に、日本の鯉幟を眺めたのは、やはり多少愉快だったのである。」と述べており、桜だけでなく、鯉のぼりを見た時に日本を思い出している。芥川は自分も他の上海に住む日本人と同様に、祖国を離れて異国で日本のものを見ることが非常に心地よいと感じ、祖国を離れて異国に住むことで初めてその感覚を体験することができることに気付いていることがわかる。

第四の話の結末では、作家は日本の男性が日本の売春婦が西洋の男性と一緒にいるのを見て不快に感じる理由を「愛国的義憤」と結論付けている。最後の話では、上海で成功し、上海で家庭を持ったX氏が、日本から上海に来た客に対して上海を絶賛し、「建築、道路、料理、娯楽、——いずれも日本は上海に若かない。上海は西洋も同然である。日本なぞに齷齪しているより、一日も早く上海に来給え。」と言いつつ、「そのXが死んだ時、遺言状を出して見ると、意外な事が書いてあった。——「骨は如何なる事情ありとも、必日本に埋むべし。……」彼自身が死んだ後、骨になっても日本に帰りたいという望みを持っていたことが描かれている。

上記の引用部分について、筆者は次のように分析する。まず、「愛国的義憤」と結論付けた日本の男性は、売春婦と西洋男性との関係を不快に感じるが、これは彼が売春婦を個人としてではなく、日本の代表として見ていたからである。彼が考えているのは彼女の個人的な情緒や選択ではなく、私たち全体の価値観や文化的アイデンティティに対する彼女の「貢献」である。次に、X氏が上海を絶賛し、最終的には日本へ帰ることを望んでいた事実は、X氏が自身の感情や理解、そして個々の行動が集団の行動や感情にどのように関与するのかという点をまだ十分に理解していなかったことを示している。つまり、芥川龍之介は祖国や民族集団、そして自身の個々の関係がどのように相互に作用し影響し合うのか、結果として何を生むのかを深く考察していない可能性がある。以上の点から、芥川龍之介は、作家として内面から異郷での日本人の郷愁を観察し、祖国を離れて異郷に定住する日本人の心情を少し理解しているが、祖国や民族集団、個人との関係などについてはさらに深く考えていないことに気づいている。

2.4 国際都市としての上海のイメージ

1921年3月30日午後四時、芥川龍之介を乗せた筑後丸は、中国の上海港に到着した。上海での観光コースとして、芥川はバンドをはじめ、租界周辺、また上海を代表する旧市街などを見物し、友人の案内で中国式茶館や西洋のダンスホールなど、さまざまな場所に足を運んでいる。

2.4.1 バンドと租界

ジャーナリスト芥川龍之介の上海の街並みに対する印象は、『上海游記』の「第一瞥(上・中・下)」と「城内(上・中・下)」の六節に集中して書かれている。その中で、「第一瞥」は、ほぼバンド及び租界での見聞である。以下、引用し具体的に見てみる。

埠頭の外へ出たと思ふと、何十人とも知れない車屋が、いきなり我々を包圍した。(中略)抑車屋なる言葉が、日本人に与へる映像は、決して薄ぎたないものぢやない。寧ろその勢の好い所は、何処か江戸前な心持ちを起させる位なものである。ところが、支那の車屋となると、不潔それ自身と云つても誇張ぢやない。その上ざっと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしてゐる。それが前後左右べた一面に、いろいろな首をさし伸ばしては、大声に何か喚き立てるのだから、上陸したての日本婦人なそは、少なからず不気味に感ずるらしい。現に私なぞも彼等の一人に外套の袖を引っ張られた時には、思はず背の高いジョオンズ君の後へ、退却しか加つた位である。

バンドは上海の表玄関であつた。船の乗客がまず目にする上海は、バンドの光景である。それは芥川にも同じである。大波に揺られて海を越え、船酔いをしたので、やっと念願の中国に着いた芥川を待っていたのは、憧れてきた古典の中国ではなく、バンドで押し寄せてくる車屋であつた。上海の表玄関であるバンドの有様を観察する余裕がなかつたせいか、当時、上海の低層社会に生きている車屋たちは何より印象的だつた。「薄汚い」「不潔それ自身」「怪しげな人相」というマイナスな表現を連発し、車屋に驚いた気持ちを少しも隠さずに表現した。第一次世界大戦後の上海における急激な工業化によって、大量の労働力の需要が生じたが、これに応えたのが苦力の存在だつた。彼らの多くは、田舎から、或は内戦を逃れ、命からがら都会に出てきた農民であつた。道路で一輪車を押し、人力車の車夫となつた人はかなり上つた。1920年代から30年代まで、上海を訪れた者は、芥川と同様、この街の代表的な交通手段である、夥しい数の人力車に驚かされた。人力車を頼りに生活している車夫は苦力の最も代表的な姿と言われる。

『上海游記』の中で、「但しあの恐るべき車屋だけは、未にもうろついてゐる。さうして我々の姿を見ると、必何とか言葉をかける。」「我我はカッフエの外へ出た。其処には不相変黄包車が、何台か客を待ってゐる。それが我我の姿を見ると、我勝ちに四方から駆けつけて来た。」と、彼らが深夜に必死で客を引く姿も記録されている。また、『上海游記』には「罪惡」の章があり、そこには、人力車夫が追剥ぎに早変わりするという話があることから、当時の彼らの貧しい生活ぶりが窺えるだろう。このように、芥川の第一印象は、まず、貧しい上海の一面だつた。

バンドに集まってきた車屋に機嫌を損ねたとは言え、租界を通り、旅館までの見聞は些か心地がよかつたらしい。滑かに動いている緑色の電車、「赤煉瓦の三階か四階」の建物、行き届いた交通整理など、上海の明るい光景を見ているうちに、芥川は「だんだん愉快的な

心持ち」になり、彼は思わず上海を称賛していた。そういう華やかな街の様子をみてから、その夜、芥川は友人とともに賑やかな四馬路を散歩し、カッフエパリジャンペ舞踏を見に移動した。

我々は食事を済ませた後、賑やかな四馬路を散歩した。それからカッフエパリジャンペ、ちよいと舞踏を覗きに行った。

舞踏場は可也広い。が、管絃楽の音といつしよに、電燈の光が青くなつたり赤くなつたりする工合は如何にも浅草によく似てゐる。唯その管絃楽の巧拙になると、到底浅草は問題にならない。其処だけはいくら上海でも、さすがに西洋人の舞踏場である。

上記の「四馬路」は現在の福州路のことで、フランス租界にあり、当時、上海で最も繁華な街路だった。芥川はこの四馬路のモダンさに驚いたようで、「到底浅草は問題にならない」「さすがに西洋の舞踏場」と評価した、租界では、嫌な車屋の存在が些か機嫌を損ねたというものの、総体的に言えば、芥川にとって上海は良い印象を残したといえよう。

2.4.2 上海の旧皇城

上海での入院生活が終わってから、芥川は友人四十起氏の案内で、上海城内を見物した。城内とは、上海の旧市街のことを指している。

1553年の明の時代に、度重なる倭寇に備えるために、周囲約6キロの上海皇城が建築された。その後約300年間は防備という城本来の役割を果たしたが、1840年のアヘン戦争後、小刀会の乱、太平天国の乱を経て、皇城はその無力さを露呈し、むしろ城内の発展を妨げるような存在になった。そこで、1912年の中華民国成立と前後して撤去された。結果、城と外濠の跡は、民国路(現在の人民路)と中華路という道路となった。

旧城の存在は、共同租界やフランス租界とは対照的な存在で、典型的な中国式であった。1897年に上海城内を訪ねた永井荷風は、「四方高壁を囲し六箇の明あり現在尚夜10時を以て明を関し人をして出入せしめず道路家屋皆中国の風を存す」と、その目にした様子を記している。画家石井柏亭は、城壁が壊される前後に上海を訪れている。再訪時の1919年の記事には、城自体はなくなり、民国路には電車が走っているが、城内にはそれほど変わっていないと書いている。やがて共同租界とフランス租界が発展し、その範囲を広げたのちも、城内は、租界と対照的な性格を保ち続ける。『上海遊記』に描かれた城内は1921年のもので、すでに城壁が撤去された後のことであるが、租界と異なる風景はありありと目に映っていた。

朱泥のやうな丸焼きの鶏が、べた一面に下がった店がある。種々雑多の吊ラムブが、無気味なほど並んだ店がある。精巧な銀器が鮮やかに光った、裕福さうな銀楼もあれば、太白の遺風の招牌が古びた、貧乏らしい酒棧もある。

馬車を降りた我我は、すぐにまた細い横街に曲がった。…減多に脇目もふらない程、恐る恐る敷石を踏んで行つた。

租界の整然とした交通事情やおしゃれな感じとは違い、旧城は雑多で、騒々しいというイメージを強く感じさせる。湖心亭で、偶然一人の中国人が小便しているところを目撃すると、芥川は大きな衝撃を受けた。礼節に反する行為を彼は赦さず、それを辛辣に中国の恐るべき象徴だと断言した。

また、城隍廟に関する描写からも、上海旧城の騒々しさが分かる。

骨董屋の間を通り抜けたら、大きな廟のある所へ出た。これは絵端書でも御馴染みの、名高い城内の城隍廟である。

廟の前へ店を出した、いろいろな露店を見物した。靴足袋、玩具、甘蔗の基、貝卸、ハンカチ、南京豆、——その外まだ薄汚い食物店が沢山ある。勿論此処の人の出は、日本の縁日と変わりはない。

それから我々は引き返して、さっきの池の側にある、大きな茶館を通り抜けた。

伽藍のやうな茶館の中には、思ひの外客が立て込んでゐない。が、其処へはいるや否や、雲雀、目白、文鳥、いんこ、——ありとあらゆる小鳥の音が、目に見えない驟雨か何かのやうに、一度に私の耳を襲った。(中略)まづ鼓膜が破れないように、匆匆両耳を塞がざるを得ない。私は殆ど逃げるやうに、四十起氏を促し立てながら、この金切声に充満した、恐るべき茶館を飛で出した。

旧城の雑踏に驚いた芥川は、これらを「新齊諧」や「聊齋志異」などの挿絵にたとえ、大いに敬服すると皮肉った。城隍廟近くの店構えを見て、「現代の支那なるものは、詩文にあるやうな支那ぢやなき。猥褻な、残酷な、食意地の張った、小説にあるやうな支那である」と断言した。第一瞥の租界とはやや違い、また古典の中から読んできたのとも、雲泥の差である。租界の繁栄に対照的な存在で、貧しい旧城であった。すでに『上海游記』において、西洋化と雑踏で貧しい中国式という二重構造の特殊な上海が強調されているが、本場の中国に、芥川は失望した気持ちを隠せずにはいられなかった。彼は意図的に、租界とは別に、「城内(上・中・下)」という三節において旧城を紹介し、憧れてきた古典にある中国との大きなギャップを強調した。

ギャップができたのは、芥川龍之介が巡った旧城における日常の現象、風景、人々の行動に対し、その観察が彼自身の前提や事前の期待に基づいているためだと考えられる。つまり、彼は中国を古典的な文化や飽くなき美的表現の源泉として理想化していた。しかし、彼が体験した現実の上海やその旧城地区は、彼が理想として抱いていた景象とはほど遠いものであった。そのため、芥川の初めての観察（「租界の整然とした交通事情やおしゃれな感じ」といった美化された観察）と二度目の観察（「旧城は雑多で、騒々しい」と感じた事実への一種の失望）の間には、重要なギャップが発生する。彼が喪失感や落胆を感じていると感じられるのは、その理由からである。

芥川は始終、先入観を持って、古典と比較しながら上海を見物してきた。先入観とは、具体的に言うと、芥川が中国文化や中国人に対して持っていた一定の期待や、それが提供すべきと考えた特定の価値、特に芥川が古典の中から読み取ったことのある「詩文にあるやうな支那」に対する彼の期待である。これにより、彼が実際に目の当たりにした現実の上海や中国人の生活が、その理想化されたイメージと一致しなかったため、彼は自身の見解を「猥褻な、残酷な、食意地の張った、小説にあるやうな支那である」と結論づけてしまったのである。

また中国平民が住んでいる城内では、乞食の存在も芥川の注意を引いたようである。

それから少し先へ行くと、…処が支那の乞食となると、人通りや二通りの不可知ぢやない。雨の降る往来に寝転んでゐたり、新聞紙の反古しか着てみなかつたり、石榴のやうに肉の腐った膝頭をべろべろ舐めてるたり、——要するに少々恐縮するほど、ロマンチックに出来上がつてゐる。

街で会った乞食の超自然の不潔さや惨めな姿は、芥川にとっては、恐縮するほどだった。

彼はこうした光景を、中国の小説に出てくる道士か神仙が乞食に化けていたという話を引き合いに出し、「**自然に発達したロマンティシズムである**」とシニカルに評している。愛読している古典にでてきた中国の印象とこれほど雲泥の差があるとは思ってもみなかったのだろう。こういう彼の皮肉な描写は、当時の上海社会を認識するための貴重な参考となりうる。そこには、国際大都市上海における、地元の中国人の貧しく苦しい生活状況が**ありありとスケッチ**されている。

芥川は租界で会った車屋や乞食に機嫌を損ねたばかりでなく、路地や城隍廟など、当時旧上海を代表する名所を見学した印象も、また不快なものだった。細い横町に、ぎっしり軒を並べた店構え、せせこましい軒先に、無暗に招牌がぶら下がって、空の色を見るのも難しい光景、目まぐるしい中国平民の通行人という騒々しい光景に閉口した。湖心亭では、一人の中国人が悠々と池へ小便をしていた場面まで、余すことなく描写した。そういう風景を目にし、芥川は「**これは憂鬱愛すべき風景画たるばかりぢやない。同時に又わが老大国の、辛辣恐るべき象徴である**」と鋭く風刺した。さらに、彼は「**現代の支那なるものは、詩文にあるような支那じゃない。猥褻な、残酷な、意気地の張った、小説にあるような支那である**」と皮肉った。このことから、幼い時から中国古典に親しんできた芥川にとって、現実の中国社会は愛すべき存在なのかどうか、再考を迫られることになった。

2.5 芥川にとっての上海理解の諸相

「上海遊記」において、芥川龍之介が述べた事柄は主に西洋、中国、日本の三つであった。

まず西洋についてである。芥川龍之介が上海で目の当たりにした西洋は彼の読書で得た知識から思い描くヨーロッパとは異なり、「低俗」であり「場違いの西洋」であった。この「低俗」と「場違い」は彼が掴み取ろうとしたものをはっきりと示していると思われる。

「十二、西洋」にて、彼は西洋に傾倒し続ける質問者を皮肉っている。このように西洋文化に没入し続ける態度は、当時の知識人が内心で感じていたことを示しているのかもしれない。芥川龍之介は日本の伝統的な慣習を引き出し、それを西洋と比較することで西洋の「低俗」さを指摘した。彼のこの視点から、彼が自身の所属する日本文化と、日本が常に模範と見てきた西洋を相対化していることが見て取れる。言い換えれば、彼が認識したのは、日本の伝統と「近代化」の問題であった。

しかし、芥川龍之介は、「低俗」と「場違い」の間に何か関連性があるのか、それが何を意味しているのかを読者に明言してはいない。「場違い」は、その原語によれば、二つの意味を持つことが出来る。まず、物が適していない場所にあるという意味、ついで、それが本地産ではないという意味である。

これを踏まえると、芥川龍之介についての西洋観は以下の三つの可能性を想像することが出来る。第1に、西洋の本質に「低俗」な存在要素があるという点、第2に、西洋が東洋に来て植民地主義を展開した為、上海の西洋はその現実を反映しており、それゆえに彼は西洋が上海に存在するのを非常に醜く、不適当な事態だと感じている点、第3に、西洋が上海に来て、東方のものと結合し、東方でも西方でもないものを生み出している点である。

いずれにせよ、芥川龍之介は上海の西洋を否定した最初の作家であったとともに、東洋の土地に西洋を移植した結果に起きた「罪悪」を初めて指摘した作家でもある。芥川龍之介が「十四、罪悪」で窃盗、殺人、売春等の犯罪や、阿片、魔鏡堂、男堂子など劣悪な風俗の存在を紹介した理由は、彼が上海における西洋的な影響とそれが東洋の地で生み出した社会的問題の現実を描くことを通じて、西洋の「低俗さ」や「場違いさ」を具体的に示

すためであると言える。彼が西洋の本質に「低俗」な存在要素があると考えていたこと、西洋が東洋に進出して植民地主義を展開した結果として上海の社会風俗が変質したことに対する彼の見解を強調するための具体的な例証として引用されている可能性がある。また、その表現から、彼が西洋影響下の上海が、東洋でも西洋でもない新たな形が生まれた場所であり、それがより混沌とし、道徳的に不健全な社会を生み出すことになったという彼の視点も明確にされる。つまり、「十四、罪悪」部分が引用される主な理由は、それが彼の上海に対する全体的な視点と評価を具体化し、補完するものだからである。

第二に中国についてである。低層階級の人々が不潔で、貪欲で、自国に対する関心が無いことは、一般的に観察者に中国の大衆の無知さを暗示している。古典劇の役者や娼婦などの描写は一方で独特の上海風情を伝え、他方で文化的な違いを認識させている。

第三に日本についてである。上海在住の日本人社会内部の描写が特徴的であり、また芥川龍之介は異国にいる日本人にしばしば愛国主義と結びつけられる望郷の情感が存在することを発見した。

芥川龍之介が上海での体験を通じて得たものは多層的で複雑である。彼の視点は、ただ一つの角度からではなく、様々な側面から上海という都市を捉えている。その中心には、「上海の居留民との交流」、「異国での日本人としての自己認識」、そして彼が目当たりにした「西洋化された上海」の風景がある。

まず、居留民との交流について述べる。彼が病院で過ごした時間は、想定外の滞在だったが、この時期に彼は多くの居留民と接触した。これらの交流から、彼は異文化理解の機会を手に入れ、特に日本人コミュニティとのつながりを深めた。彼はこれらの人々から敬意を受け、さまざまな視点を共有した。この経験は、彼の内部における自己認識と対外的な日本人像に影響を与えたと考えられる。

次に、日本人としての自己認識について述べる。芥川は上海での滞在を通じて、自らが日本人であるというアイデンティティにより深く問い直す契機を得た。中国という異文化の中で自らの立場を見つめ直すことで、芥川は日本人としての自己認識を新たな視点から捉え直した。例えば、彼は上海で俳句会を開いており、これは日本の伝統を守り伝えようとする彼の姿勢を示している。日本から遠く離れた地で彼が追求した文化活動は、彼の国民性に対する探求と密接に関わっていると言えるだろう。

最後に、「西洋化された上海の風景」について述べる。上海のバンドや旧市街など、芥川が目当たりにした上海の風景は、彼に強烈な印象を与えた。特に、バンドでの西洋と中国の交錯する光景は、彼にとって新たな文化的ショックであった。芥川は、上海が持つ西洋化されたイメージと、本来の中国の伝統が失われつつある現実を同時に目当たりにした。彼の記述からは、西洋化は一面的に「低俗」と感じられる一方で、上海が国際都市としての多面性を持っていることにも注目している。

以上の三点から、芥川龍之介の上海体験は、彼の文学と世界観に深い影響を与えたとと言える。上海での様々な経験は、彼の日本人としてのアイデンティティ、異文化への理解、そして文化の多様性への認識を深める機会となった。芥川の上海に関する記述は、彼自身のアイデンティティを再確認する旅であり、同時に異文化交流による知見と理解の拡大を示している。

3. 横光『上海』の中の上海

本章では、まず『上海』の主要な舞台であるバンドと租界について詳述し、この地域が当時抱えていた経済的、社会的な葛藤を横光がどのように描写したかを考察する。次に、3.2節では、小説の登場人物を通じて、当時の上海における多様な社会的階層とその相互

作用を分析する。さらに、3.3節では作品が日本との関係をどのように反映しているかを掘り下げ、特に「東洋の掃き溜め」としてのイメージが強調されていた当時の国際的な都市としての側面に焦点を当てる。最後に、3.4節では横光利一の『上海』がどのように文学作品やその後の思想に影響を与えたかを考察し、彼の上海理解の諸相を総括する。

3.1 『上海』のあらすじ

1925年、上海にある日本人銀行員の参木は解雇された。トルコ風呂でマッサージをしていたお杉も、参木の冗談が原因で雇い主のお柳に解雇された。お杉は参木を密かに想い続けていたが、参木の友人である甲谷に強姦されてしまう。甲谷の兄である高重は、参木に東洋紡織会社で仕事を見つけてくれる。参木はそこで中国人女性である美しく魅力的な芳秋蘭に出会い、彼女に心を奪われる。しかし、芳秋蘭は紡績工場で働くだけでなく、共産党の中心メンバーでもあった。芳秋蘭と彼女の仲間は、上海の労働者を組織して外国資本家を中国から追い出す大ストライキを計画する。労働者と植民地当局の武装が衝突する中、参木は芳秋蘭を二度救い、彼女の愛を得る。より激しい戦闘の後、芳秋蘭が参木と接触したことで、スパイとして処刑されたとの噂が広まる、参木も中国人に襲われる。彼は逃げて、売春婦となっていたお杉の家に隠れ、絶望と悲しみに包まれる。

3.2 『上海』の登場人物紹介

長編小説である『上海』に登場する人物は非常に多く、その関係は複雑である。後続する論述と読者の理解を容易くするために、以下では男性と女性に分けて小説の登場人物の背景を紹介する。なお、登場人物紹介は、小説内の登場順に基づいて行う。

3.2.1 男性キャラクター

参木（さんき）：上海に住む参木は、毎日のように自殺方法を考えている男だった。彼は上海に10年いて、常緑銀行で働いていた。横領した銀行の金額を上司に隠す手助けをしなければならなかったため、帳簿隠しをしていた。彼は現実の生活に虚しさを感じていたが、日本で貧しい生活をしながらも温かい家庭にいる母親のことを考えると、平穏な日々を送ることが母親に対する親孝行だと自分に言い聞かせた。ある日、常緑銀行の現金輸送車が襲われるという噂が流れたとき、参木が行うのではなく、上司が処理するように頼んだため、上司の不興を買って解職になった。その後、山口（参木と甲谷の共通の友人である。後ろの二つ目の段落で紹介する。）の家に住んでいた頃、甲谷の兄、高重さんの紹介で高重が勤める東洋綿糸会社の取引部に入社した。

甲谷（こうや）：甲谷は参木と小学校時代からの友人である。甲谷はシンガポールの木材会社で働いており、今回上海に来ると、自社の木材を売りながら相手を探そうとしている。彼は資本主義を具現化した人物である。お杉を脅してから、「——いや、しかしだ。まアまア、五円も包んでやれば、それでおしまいさ。良心か、何にそんなことが必要なら、上海で身体をぶらぶらさせている不経済な奴があるものか。——」と考える。甲谷は舞娘である宮子に目をつけ、彼女を追いかけながら、同時にお柳とも付き合っている。

山口：山口はアジア主義者であり、建築家でもある。お柳と芳秋蘭との出会いは、お柳の夫である銭石山の紹介によるものである。自宅の地下室で中国人の死体を処理し、医師に売るために人骨標本を作って大金を稼ぐ。山口はオルガを妾として扱うが、同時にお杉を気に入り、お杉を追う。

高重：高重は甲谷の兄であり、東洋綿糸会社で働き、日本資本を代表する人物として甲谷と同様である。お柳のトルコ風呂の常連客であり、工場を襲撃する暴徒の時に、中国労

働者1人を射殺し、五・三〇事件を引き起こした。

銭石山(せんせきさん)：銭石山は上海の富豪であり、お柳の夫であり、親日家である。ただし、方秋蘭の所属する共産党に金銭的な援助を行ったことがある。

3.2.2 女性キャラクター

お柳(りゅう)：お柳は蒸気浴店の女将で、中国の富豪である銭石山の妾である。蒸気店を運営しながら、性的な相手を探している。参木に興味を持っているが、参木は彼女に興味を示さず、お柳の前で自分がお杉に興味を持っていることを示している。そのため、お柳は怒り、お杉を解雇した。お柳は甲谷と不倫関係にあり、彼女の存在は租界が持つ非道徳な快樂を示している。

お杉(すぎ)：お杉はもともとお柳のトルコ風呂で働いていた。参木に片思いを抱いていた。解雇された後、参木を探しに参木の住まいに行ったが、甲谷と出くわした。参木が帰ってくるのを待つ間、夜に甲谷に凌辱された。朝目を覚えると、自分と甲谷と参木が一緒に寝ているのを見つけ、誰に襲われたのか確信できなかった。後に売春婦として随ちていった。

競子：競子は甲谷の妹であり、結婚後、日本の東京に移住した。参木は一途に競子を思っていた。夫が亡くなったため、上海に戻る必要があったが、彼女の兄である高重が五・卅惨事を引き起こし、上海が混乱していたため、一時的に戻れなかった。

宮子：宮子は美しい舞妓である。彼女が勤める舞踏場では、アメリカ、ドイツ、フランスなどの欧米諸国の男性たちが彼女に取り合っている。甲谷は彼女の美しさに惹かれ、絶えず求婚した。しかし、宮子は彼を相手にしなかった。逆に甲谷が紹介した参木に心惹かれた。

芳秋蘭(ほうしゅうらん)：芳秋蘭は共産党員で、中国人女性ならではの優雅な美しさを持っている。高重の東洋綿糸会社工場に潜入している。参木は彼女を工場で夜勤する際に見かけ、彼女の眼差しに引き込まれた。共産党系の工員たちが工場を襲撃した際、参木が彼女を救出した。その後、彼女も参木に惹かれるようになる。

オルガ：オルガかつてはロシアの貴族であり、ロシア革命の際に家族で中国に逃れた。現在は山口の妾として暮らしている。ロシアから脱出する際の思い出を振り返り、癲癇発作に襲われる。参木が失踪した後、山口家での日々を過ごし、オルガと共に過ごす。当時、オルガは参木を誘惑しようとしたが、参木は常に慎み深い態度を保ち、オルガの求愛を断り続けた。しかし、オルガは参木に惹かれていった。

3.2 日本人と上海の関係

横光利一の『上海』は、創作の立場からいえば、芥川龍之介の『上海遊記』とは根本的に異なっている。芥川龍之介は上海を観察した際、上海で接した珍しい見聞を述べている。横光利一が描いたのは、上海に住む「日本人居留民」の世界だ。「上海」の立脚点は異郷にいる在留民の立場で、作品の中で彼はさまざまな立場、生活態度に立った在留民をデザインし、これらの異郷にいる日本人の視点から上海を眺め、居留民ひとりの上海との出会いを描いたもので、彼らの目に映るものは観光客が見るものとは全く異なっている。彼らは租界を構成する一部となり、同時に祖国日本と自分との関係を求める漂流者となっていた。こうして横光利一の『上海』は、租界における日本社会の存在を前提として、租界内部から上海を見る視点を完全に獲得した。彼は日本人と上海の関係を、それぞれの人物が代表する立場や人物同士の関係の中に体現している。そこで、ここからは上記の主要人物の役割とその関係、そしてその背後にある代表的な上海との関係を分析していく。

3.2.1 甲谷と他人物の関係から見る租界内の混乱

甲谷とその長兄高重は、お柳のトルコ風呂の常連であり、甲谷はお柳と不正常な性的関係を持っている。甲谷はお杉を強姦するが、その行為に対して全く罪悪感を抱かず、万一事が露見した場合、お杉に五円を渡せば解決すると考えている。彼にとって、上海でお杉のような女性の肉体はただの金銭的価値しか持たないものであった。甲谷とお柳の関係は、「上海」の租界内の道徳観念の退廃を象徴している。お柳と彼女の夫である錢石山の関係も、錢石山がお柳の蒸気浴場経営を許し、客との情事を観察し、さらに甲谷の前で淫らな行為を見せることで道徳の混乱を表している。

甲谷やお柳、錢石山の他にも、山口という人物がいる。山口は中国人の遺体を集めて自宅の地下室で人骨標本を製造し、大金を稼いでいる。彼は甲谷に対して「**一つの中国人の人骨標本が七人の没落白ロシア貴族の女性を養える**」と自慢している。しかし、山口の形象は甲谷のような単純な道徳的退廃を示すものではない。彼は没落白ロシア貴族の女性オルガを家に養い、彼女は山口と甲谷の共通の友人木村から山口に売られた女性である。舞踏場で甲谷に会った時、山口は半ば冗談半ば本気でオルガを側室にするよう勧める。しかし、彼の言葉とは裏腹に、物語上で山口とオルガの間には特別な男女関係の描写はない。山口が好んでいるのはお杉であり、その理由はお杉の純粹さにある。「**数多くの無恥の放蕩を見てきた**」山口にとって、マッサージをしている時に恥ずかしそうに赤面するお杉は「**人に忘れ去られた岩陰で独り生い茂る青々とした若芽のように愛らしい**」のである。

3.2.2 参木から見る租界と日本のアイデンティティ

横光利一は、各男性登場人物に仕事や事業に意味を持たせる一方で、彼らがそれぞれ異なる女性を追い求めることで、当時の上海、特に租界内の混乱した人間関係と道徳の欠如を表現している。

その中で、参木の人物設定は特別である。栗坪良樹（1990）を代表者とする多くの研究者が参木の解釈に注目している。理由の一つは、参木が小説の冒頭部分に登場し、結末部分にも現れるため、自然に彼の役割が重要だと感じられるからである。しかし、最終部分はお杉の心理に焦点を当てているため、この小説が参木の立場で終わるわけではない。前田愛（1992）の見解に賛同する形で、参木は「都市空間を自由に撮影するカメラのような分析判断の機能」を持っていると述べられている。

参木の職業は銀行に勤務しており、上司の汚職を隠すために帳簿を操作するという無意味な仕事をしている。解雇された後、彼は東洋綿糸公司に入ったが、高重のように完全に日本資本の立場に立つことはできなかった。参木の彷徨は、彼が女性たちの間を行き来する描写によって表現されている。彼は常に甲谷の妹である競子を愛しており、貞操を守るためにお柳、お杉、宮子、オルガなどの女性と距離を保っている。道徳的には「彼は常に伝統的な道徳を愛していた」とされ、「この中国で、性の問題において古い道徳を愛することは太陽のように新鮮な思想である」と考えている。参木は東洋綿糸公司の取引部に入社した後、日本への関心が競子への愛情よりも強くなり、最終的に「**自分は日本を愛さねばならぬ**」と考え、「**彼はだんだん、日光の中で、競子の良人の死ぬことを望んでいた自分自身が馬鹿馬鹿しくなって来た。**」と悟る。参木は「有夫の競子を密かに愛する空虚な日々」を断ち切ることを決意し、その愛情を断つために中国の女共産党員芳秋蘭を愛するようになる。競子への愛を断ち切るために中国の女性共産党員芳秋蘭を設定した横光利一は、彼女に恋をした後、参木は国家の問題、プロレタリア革命の問題に足を踏み入れる。高重について夜勤の時に偶然見かけた芳秋蘭は、彼女の拳銃の狙いどおりの鋭い眼差しに

惹かれた。やがて暴漢が工場に押し入ったとき、参木は彼女を救い、その夜は病院に運んでから彼女の家に戻し、その夜は彼女の家の隣室に泊まった。五〇〇惨事が行われた上海の街を徘徊し、混乱の中で最後に芳秋蘭を見かけた後、食べ物を求めて宮子の住まいにやってくる、宮子と喧嘩し、最後にお杉の住まいに行き、お杉と一緒に寝てしまった。

(九)では、馘首された参木が料理屋で明日からどうやって生計を立てるかを考える部分で、上海租界で生活している外国人について：

どこの国でも同じように、この支那の植民地へ集っている者は、本国へ帰れば、全く生活の方法がなくなってしまっていた。それ故ここでは、本国から生活を奪われた各国人の集団が、寄り合いつつ、全くここに落ち込んだが最後、性格を失った奇怪な人物の群れとなって、世界で類例のない独立国を造っていた。しかも、それぞれの人種は死に接した孤独に浸りながら、余りある土貨を吸い合う本国の吸盤となって生活しなければならぬのである。このためここでは、一人の肉体はいかに無為無職のものとも、ただ漫然といることでさえ、その肉体が空間を占めている以上、ロシア人を除いては愛国心の現れとなって活動しているのと同様であった。——参木はそれを思うと笑うのだ。事実、彼は、日本におれば、日本の食物をそれだけ減らすにちがいがなかった。だが、彼が上海にいる以上、彼の肉体の占めている空間は、絶えず日本の領土となって流れているのであった。

それから参木は、職業はないが、上海における自分の身体も、お杉の身体も、日本の領土であることに気づいた。参木のこのような感覚は、彼ら居留民が租界における「特殊権益」移民によって定住している事実を示しており、居留民はいわゆる租界における外国人の「権益」の肉体的表現である。参木が祖国を思う部分について、(十九)では、東洋綿糸会社の取引部に入った参木が上海の銅、銀、金貨の取引を観察し、上海の金融を独占しているのはイギリスの銀行だと考えた。参木は祖国日本とイギリスの勢力を比較し、祖国の現状を憂えた。(十九)は参木が上海で働く中での複雑な経済状況と、彼が抱く母国日本に対する感情や憂慮が描かれている。また、最後の部分では、競子を祖国日本と比較して、「やがて、競子は一疋の鱒のように、産卵のためにこの河を登って来るにちがいない。だが、それがいったい何んであろう。自分は日本を愛さねばならぬ。だが、それはいったい、どうすれば良いのであろう。」という結論を得て、そのために何をすべきか、後参木は「しかし、——先ず、何者よりも東洋の支配者を！」と自問した。このことから、参木という役柄は、横光利一によってつくられたもので、祖国日本に対する愛国の感情だけでなく、祖国に対する帰属感とアイデンティティの感情も重要であることがわかる。したがって、上海租界にいる居留民であっても、自分の祖国に対して消し去ることのできない思いと、認め、支持しているという結論を垣間見ることができる。

3.3 国際都市としての上海のイメージ

3.3.1 金融中心地であるバンドと租界

芥川は上海の騒々しい面ばかりでなく、その西洋化された側面にも注目した。それに対して、横光は上海の「掃き溜め」のような側面を強調する一方、アジアの金融経済都市上海という性格も描いている。「静安寺の碑文」の中で、横光は次のように書いている。

この感じは感覚的なもので いたる所にある戦争と描かれた両替屋が私に刺激を与えたのである。私は金塊相場の立つ所を見に行き、金と銀炉の運動の変化や綿花の売買方法を私に知られる限り知ろうとした。

当時、既にアジアの金融センターとなっていた上海を見て、横光は恐らく相当な衝撃を受けたのだろう、世界有数の金融市場という上海の顔は、『上海』からも窺える。

商業中心地帯へ這入ると、並列した銀行めがけて、為替仲買人の馬車の密集団が疾走していた。馬車は無数の礫を投げつけるような蹄の音を、かつかつと巻き上げつつ、層々と連なりながら、大路小路を駆けて来た。この馬車を動かす蒙古馬の速力は、刻々ニューヨークとロンドンの為替相場を動かしているのである。馬車は時々車輪を浮き上げると、軽快なヨットのよう飛び上った。その上に乗っている仲買人たちは、ほとんど欧米人が占めていた。彼らは微笑と敏捷との武器をもつて、銀行から銀行を駆け廻るのだ。彼らの株の売買の差額は、時々刻々、東洋と西洋の活動力の源泉となつて伸縮する。一甲谷は前から、この港のほとんど誰もの理想のように、この為替仲買人になるのが理想であつた。

海港からは銅貨が地ガへ流出した。海港の銀貨が下り出した。ブローカーの馬車の群団は日英の銀行間を馳け廻った。金の相場が銅と銀との上で飛び上った。

引用部分は、主人公甲谷の視線で捉えられているものである。銀行から銀行へ、また為替市場、金塊市場へと馬車を走らせる「為替仲買人」の姿であり、「東洋と西洋の活動の源泉」たる国際金融商品としての金塊と株について描かれている。これらの景観は国際金融・商業中心である上海の姿を見事に炙り出している。1920年代から1930年代にかけて、上海は中国最大の都市として発展し、イギリス系金融機関の香港上海銀行を筆頭に中国金融の中心となった。特に、バンドに林立している旧匯豊銀行、百老匯ビルなどの高層建築群、繁華街南京路にある世界的な大百貨店先施公司、永安公司等が上海の繁栄を表わしていた「魔都」あるいは「東洋のパリ」とも呼ばれた国際都市上海は世界中の人々の憧れの地となり、大勢の外国人を引き寄せていた。小説『上海』において「お前は百万円掴んだとき、成功したと思うだろう」という参木と甲谷との会話からも、上海は富と夢を追う成功の地と考えられていた都市像が読み取れる。

3.3.2 「東洋の掃き溜め」

『上海』において、横光の描写は上海の実景、それも典型的な都市空間の位相を的確に捉えながら、最終的には実際の地名を抹消している。また、空間の座標軸を意識的に外すという方法は、時間の処理にも貫徹されている。このような特殊な創作方法を取り、横光は芥川と違って、モダンなしゃれた上海の顔を避け、騒々しい城内の雰囲気とは異なる、街全体に暗く怪しげな雰囲気を濃く漂わせている。小説『上海』における街並みの描写は主に、1、2、4、5、9、10、12、15、16、22、25、29の各章と最終章の45章に集中している。以下、関連部分を例に考察してみたい。

まずは第二章において、トルコ風呂の話をするときの、近くの街並みの様子である。

崩れかけた煉瓦の街。その狭い通りには、黒い着物を袖長に着た支那人の群れが、海底の昆布のようにぞろり満ちて淀んでいた。乞食らは小石を敷きつめた道の上に蹲っていた。彼らの頭の上の店頭には、魚の気泡や、血の滴った鯉の胴切りが下っている。そのまた横の果物屋には、マンゴやバナナが盛り上つたまま、舗道の上まで溢れていた。果物屋の横には豚屋がある。皮を剥れた無数の豚は、爪を垂れ下げたまま、肉色の洞穴を造つてうす暗く窪んでいる。そのぎつしり詰った豚の壁の奥底からは、一点の白い時計の台盤だけが、眼のように光っていた。

この豚屋と果物屋との間から、トルコ風呂の看板のかかつた家の入口までは、歪んだ煉

瓦の柱に支えられた深い露路が続いている。

第五章では、首になったお杉が、トルコ風呂から追い出された後、参木のところまで歩いてきたときの様子について書いている。その街並みの様子と参木の部屋から見下ろした上海の景観を次のように書いている。

彼女は露地を出ると、舗道に閉め出された黄包車の車輪の傍を通り、また露路の中へ這入っていった。露路の中には、霧にからまつた円い柱が廻廊のように並んでいた。暗い中から、耳輪の脱れかかった老婆が咳きをしながら歩いて来た。

お杉は柱の数を算えるように、泣いては停り、泣いては停つた。彼女は露路を抜けると裏街を流れている泥溝に添つてまた歩いた。泥溝の水面には真黒な泡がぶくりぶくりと上つていた。その泥溝を包んだ漆喰の剥げかかった横腹で青みどろが静に水面の油を舐めていた。

彼女の見ている泥溝の上では、その間にも、泡の吹き出す黒い芥が徐々に寄り合いながら一つの島を築いていた。その島の真中には、雛の黄色い死骸が猫の膨れた死骸と一緒に首を寄せ、腹を見せた便器や靴や菜つ葉が、じっとり積つたまま動かなかつた。

横光が書き記す上海の街は、黒い泡が浮かぶ泥溝、血まみれの家畜、腐った野菜のような汚いものばかりで、街中は陰鬱で、日当たりのない退廃的な都市である。このような描写の繰り返しで、読者に強い視覚的なインパクトを与え、そこには暗く混沌とした、不快で不気味な雰囲気漂っている。これらはほとんど「お杉」という湯女によって語られている、彼女は作品の中で、哀れで惨めな存在である。トルコ風呂から追い出され、参木の処で、甲谷に犯され、居場所を失った彼女は仕方なく、路地の娼婦になった。こういう悲惨な道を歩んでいるお杉によって、「掃き溜め」のような上海は、全体的に悲しい雰囲気を持つ街として描写され「濁った底知れぬ虚無の街の上海」というイメージが定着するのである。

3.4 横光にとっての上海理解の諸相

3.4.1 『上海』から見る横光の西洋観

横光が上海を訪れた1928年にせよ、小説の創作背景となる1925年にせよ、上海租界は繁栄期で、世界の大きな金融都市であったことは言うまでもない。当時の上海は世界の縮図のような世界にはアメリカ人を初めとする欧米人や日本などのアジア人が生活を送っていた。その中では、とりわけ、西洋人が上海租界の繁栄に大きな貢献をしていた。上海租界にはフランス租界、イギリスとアメリカの共同租界などがあり、そこで暮らす欧米人はその数においても、無視できない存在であった。しかし、本小説に登場する主人公たちの国籍などを分析してみると、西洋人は一人も出てこない、いささか不思議に思われる。

小説『上海』は1925年の上海を舞台に、作者は11名にもものぼる主要人物を登場させている。上海の常緑銀行で働いていた銀行員参木、シンガポールから来た商売人甲谷、トルコ風呂の湯女お杉、内外綿会社の資本家高重、ダンスホールのダンサー宮子、アジア主義者の建築士山口、トルコ風呂のオーナーお柳及びその主人の資本家銭石山、共産党戦士芳秋蘭、そして宝石商アムリ、山口の家にいた娘オルガなどである。そのうち、日本人は参木、甲谷、お杉、高重、宮子、山口とお柳の七人で、中国人は銭石山と芳秋蘭の二人で、インド人はアムリで、ロシア人はオルガ一人である。これらの登場人物の国籍から見れば、

横光は上海を完全にアジアの舞台とみなし、この大都市での様々な日本人の生き様や苦悩などを炙り出すことに筆を尽くしたようである。フランス租界や共同租界で威張っている欧米人の姿はあまりにも少ない。当時、上海の租界の繁栄を支えていたのは、アジアだけでなく欧米人が大きな役割を果たしていた。しかし、登場人物の設定から見ると、横光は欧米人主導の上海の賑やかさを意図的に避けているきらいがあるようである。こうして考えれば、これは単に欧米を無視するばかりでなくて、横光の心底には、西洋を見下し、アジアにおける西洋の支配に反発する意志が潜んでいるとも考えられるのではなかろうか。

主要な登場人物ではないが、『上海』には西洋人が数名登場している。名前が出ている西洋人が二、三人いた。しかし、わずかに登場したその数名の西洋人は、殆どダンスホールにのみ姿を現し、日本人の踊り子の宮子を中心に描かれている。

二人は煙草を取り上げて吸ひながら、暫く外人達の宮子をからかふ會話に耳を傾けて黙つてゐた。

「あれは君、アメリカ人かい。」と、しばらくして甲谷は訊いた。「うむ、あれはパーマージップビルディングの社員が二人と、マ・カンテイル・マリン・コンパニーが一人だ。ところが、今日はこれならまだ静かながで、ときどき宮子を中心に、ここで欧州大戦が始まることもあつたりしてれ。それが楽しみで、実はここへ来るんだが、あの女の本心だけは、流石の俺にも分らんね。」

ダンスホールは上海において、典型的な娯楽施設であつた。作品中の欧米人たちが一人の日本人の踊り子をめぐって、「欧州大戦」を行うこともあるという話からも、彼らの贅沢で淫逸な生活ぶりが同える。また、第29章では、ダンスホールを舞台に、ドイツ人のフィルゼルとアメリカ人のクリーバーの二人の会話が見られる。二人は互いに攻撃したりして、気炎をあけるが、踊り子宮子の一言で、静かに口を閉じたと書かれている。そこでは、アジアで威張っていた西洋人が、あたかも意気消沈したように、日本人の前では、全く権威を失ったかのように描かれている。この場面から、横光の西洋嫌悪あるいは蔑視的な態度が窺える。

しかし、ふと彼は、頭の上野電球を仰ぐと、暫くほんやりしてみしてから、突然叫びだした。

「これは、僕の会社の電球だ。萬歳。萬歳、ばんざあい。」

クリーバーは彼と同様に天井を仰いでみた。が、忽ち、上げてゐるフィルゼルの手を引き降ろした。

「君、これは、チー・イーだ。おれの会社の電球だ。ゼネラル・エレクトリック・コンパニー、萬歳。萬歳、萬歳。」

「いや、これは、アー・エー・ゲーだ。エミール・ラテナウの白熱球だ。萬歳。」

「いや、これは、—」「まあ、馬鹿馬鹿しい。これは、日本のマツダ・ランプよ。」と宮子は言つた。二人は上げかけた両手をそのままに、ぽかんとして天井を見つめたまま黙つていた。すると、クリーバーは急に子供のやうに叫びだした。「さうだ。これや、三井のマツダだ。われわれゼネラル・エレクトリック・コムパニー、日本代理店、マツダ・ランプ、萬歳」

宮子の前で、彼女の歓心を買うために、見栄を張っているドイツ人とアメリカ人の醜態や、1つの電球をめくり互いに張りあふ馬鹿馬鹿しい振る舞いなどから、西洋人の無知蒙昧が

表現されている。宮子の一言で初めて、ようやく自分たちの可笑しい仕草に気付いたということからも、「子供」のように叫びだしたという表現からも、横光の西洋に対する軽蔑感が見てとれる。恐らく萬歳三唱の歓声も、日本人を真似しているのだと考えられる。ダンスホールでのこのシーンは、アジアを横行する西洋人の姿とは全く異なるイメージとして捉えられ、上海が完全な享楽の場となっているように感じさせられる。彼らが日本人の踊り子の言いなりになっているように描かれたのは、日本と西洋との位置づけという問題における横光個人の立場と理解できよう。

以上、登場人物の分析から、横光は、上海を描くときに、故意に欧米の存在をぼやかす傾向があるようである。わずかに名前が出てきた欧米人は、大体ダンスホールに限られ、日本人の踊り子を中心に行動している。それは世界で横行していた西洋人のイメージとは全く異なるものである。特に、上海という西洋化を極めた国際的な都市において、西洋人があまり重視されていないのは不思議だと思わざるをえない。横光が意図した理由を考えれば、おそらく、彼は心の中で西洋崇拜をせず、むしろ否定的な態度を示した結果なのではないかと考える。

3.4.2 『上海』から見た横光の社会革命観

西洋に対して、横光はどちらかと言うと否定的な態度で、好感を寄せていなかったようであるが、それは東洋対西洋という立場から作品を描いたからだと考えられる。しかし、同じ東洋に位置している中国に対しても、横光はまた同じように厳しい態度を示している。中国の命運を左右する革命に対して、横光は果たして、共感を持っていたのかどうか、検討すべきである。

『上海』において直接革命に関係した人物はロシア人のオルガと中国人の共産党員芳秋蘭の二人しかいない。そして、この二人は、いずれも五・三〇事件と密接な関係を持っているとは言えない。特に、中国人の共産党員の芳秋蘭は革命から離れた存在で、妙に孤立しているようで、「肝心の群衆にまったく人格を附さなかったため」と指摘された通りである。この二人の女性の生い立ちを辿れば、横光の対革命観が明白に見えてくるはずである。

3.4.3 亡命ロシア人オルガと社会革命の負の影響

オルガというロシア人女性は、元ロシア貴族の出身で、国内の革命のせいで家族全員揃って国を脱出し、ハルビンを転々として、最後は上海に流され、日本人に弄ばれた存在である。革命とどのような関わりがあるかといえば、中国革命の母体であるロシア革命を生々しく経験してきた人物である。小説の中でも、彼女は革命への懐疑的で悲観的な態度を語る著者の語り手の役割を担っている。オルガは『上海』の第四章に登場する人物で、貴族の娘として、革命に翻弄された運命を背負っている。

アジア主義者の建築士山口と、シンガポールから材木取引をする日本人甲谷との会話から、オルガはもともと木村という日本人の女で、木村が競馬場で負けたため手離した元貴族の女性で、山口がオルガに飽きたため、甲谷に譲ろうとことがわかる。第 43 節には、オルガが自分の生い立ちを打ち明ける場面がある。

売られちゃつてきてみたら、それが木村つていふ日本人の競馬狂人なの。この人はまああたしを人間だと思ったことは一度もなくつてよ。言葉が一つ通じないもんだから、逢ったらいきなりあたしのことを抱いてでしやびしや叩くの。あたしそれが初めは日本人の礼儀なんだと思つてあたわ。そしたらあたしをしばらくしてから競馬場へ連れてって、自分

が負けたら直ぐその場であたしを売っちゃつたの。それがつまり今の山口なんだけど、でも、木村ほどひどい男つてあたし初めてだったわ。

彼女は物のような扱いを受け、次から次へと男を押し付けられ、元はロシア貴族でありながら、革命による運命の転落を生々しく語り続けていた。『上海』において、はっきりとロシア人という身分を明かしている人物がもう一人いる。それは、主人公参木が道端で出会ったロシア人の男の乞食であった。

「君、一文くれ給え。どうも革命にやられてれ、行く所もなければ食ふ所もなし、困ってるんだ。これぢや今にのたれ死にだ。君、一文恵んでくれ給べ。」

この乞食による告白も、ロシア革命の影響を伝えるものである。

オルガは主人公の参木に、ツルゲーネフのバザロフのことを聞かれた時、「それはボルシエビーキの前身ですわ」「あたしたちが、どんなに困らされたかと言ふことも、ご存じないのね」と、革命への憎しみや嫌悪を隠さずに語りまた、二人が揉みあった時に、以下の会話を交わしている。

「いや、いや、出ちゃ。」

「ぢや、僕はここにかうして一晩立っていなきあなんのですか。」

「ボルシエビーキ、悪魔、あなたたちはあたしをこんなにしたんです。」

「僕はボルシエビーキぢやありませんよ。」

「さうよ。あなたはボルシエビーキです。さうでなくちや、あなたのやうに冷淡な人なんか、ゐやしません。」

オルガの話から、今の窮屈な境地は「ボルシエビーキ」のせいであり、しかもそれを「悪魔」と語っている。もともと革命の目的は、今の状況を改善し国民にもっと裕福な生活を与えるものであろう。しかし、ロシアのボルシエビーキは、亡命した者から恨まれ、悪魔と呼ばれていた。このように、横光は意図的に貴族の娘だったオルガの口を借り、革命の負の影響を訴えることによって、自身の革命に対する悲観的な態度を明らかにしたかったものと推測できる。

とりわけ、最後に登場する、オルガが甲谷にロシア革命に関する話をする場面の、その生理的な反応は、一層読者の同情を誘い、作者横光の革命への懐疑的な態度が一層明白になっていると考えられる。「此奴は革命の話となると、狂人みたいになるからね」と山口は甲谷に釘をさした。オルガ自身も「あたし、この話をするときは癲癇がおこるのよ」と、自ら告白している。オルガのこのような激しい身体的反応は、革命がもたらす辛い思い出が直接の誘因となっていた。

「革命つてどんなことだか大体でもわかっていれば、あたし革命なんか起こるもんぢやないと思ふの」と、オルガは振り返り革命への批判的な立場を語っている。社会革命を身を以って体験し、国を出ざるをえなかったロシア人に託して、その後の悲惨な運命や革命への怨嗟を語らせることによって、革命の負の影響を提示すると共に、革命というものは不愉快なものであるということを明らかにしたかったのであろう。

1925年はロシア革命から、8年が経過した時代である。横光はその時代背景についても多少知識を持っていた。そもそも革命というものは、プラスとマイナスの両面を持たざるをえない、歴史上成功を遂げた革命の殆どは国を進歩させ、総じて国民の生活を改善した。

しかし、置かれた社会階級によってそれは異なる。『上海』においては、この貴族出身の女性の生い立ちを辿って、そこから革命がなされることによって蒙る犠牲が生々しく語られるばかりである。オルガの気持ちは恐らく横光自身にも共通していたのではなかろうか。彼はそういう革命の負の影響を蒙った女性の自白を通して、自身の革命への不審の念や悲観的な見方を示したと思われる。

3.4.4 中国人女性革命家芳秋蘭から見る革命への不信感

オルガというロシア人女性への考察から、横光の革命への悲観的な見方を導き出したが、もう一人の女性、芳秋蘭にも同様なことが言える。『上海』に登場する芳秋蘭という女性は中国共産党の黨員で、上海の紡績工場のストライキを指導する人物でありながら、日本人の参木の心を惹きつける美貌を持った中国人女性であった。小説全編に、共産黨員として登場するのは彼女一人だけで、最初に登場するのはダンスホールである。一見、非合理的な設定であるようだが、ホールで耳輪を輝かす踊り子が、白色テロの行動を探查する女性闘士であった。といったことなどから、その設定にもうなづける。彼女の美しさには甲谷に思わず「歌餘舞ひ倦みし時、嫣然巧笑。去るに臨んで秋波一転」と徐校濤の美人譜の一句を思い浮かべるほどのものがあつた。因みに、ここでの描写は、後述するが、芳秋蘭が参木の目を引き付けることを伏線に書かれたものと考えられる。

芳秋蘭は暴動が起こる度に現場に姿を表したが、革命あるいは革命の主体である群衆との関連は薄い。それより、むしろ参木に深く関わっているのである。一回目の「東洋紡績」の暴徒による事件の時、芳秋蘭は参木に救われ、中国におけるプロレタリア運動について、論争を交わしている。そこでの参木は明らかに革命入の否定的な態度を明らかにしている。

「ただ僕はマルキストのやうに、自分を世界の一員だと思ふことができないだけの日本人です。あなたたちマルキストは、西洋と東洋との文化の速度を、同じだと思つてらっしゃるやうにお見受けするんですが、僕はそこの誤謬から、ただ秀れた犠牲者を出すことだけが唯一の生産のやうに思はれるんです」

ここでは、参木はマルキストを皮肉り、誤謬と犠牲というその負の影響のみを述べているが、これは革命への不信感の表われであろう。もちろん、それは同じく作者横光の考えでもあると思われる。参木の疑問に、芳秋蘭は反論しようとしたが、結局参木を納得させられなかった。外国資本の支配に抵抗し、プロレタリア革命によって自国の独立を目指している芳秋蘭たちの行動に対して、「僕は中国の人々が日本のプルジョアジ-を攻撃するのは、結果に於て日本のプロレタリアを虐めてるのと同様だと思ふんです」「中国がいま外国資本を排斥することから生じる得は、中国の女化がそれだけ各国から遅れていくと云ふことだけにあるんじゃないか」と批判する。芳秋蘭は外国資本の不当性と中国革命の必然性を語るが、行動としては、群衆と離れてしまい、革命から孤立していることは事実だと言わざるを得ない。しかし、高重の話によると、今回の暴動を仕組んだのは芳秋蘭の一味だということである。

二回目の暴動「顧正紅事件」が起こった時も、芳秋蘭は共産黨員として群衆と一緒にではなかった。芳秋蘭についてはただ、「彼女は旗の傍で、工部局属の支那乃邏卒二腕を持たれて引かれていた」「秋蘭は巡邏の腕二身を任せたまま、彼の眼前で静かに周囲の動乱を眺めていた」と記述されている。暴動に参画する熱心な共産黨員、革命家の姿とはかけ離れている。

芳秋蘭の最後の登場は、工務局の納税特別会議が流会になった時だった。その時、上海はまだ暴動状態のままであった。芳秋蘭は男に装し、前回のよう、参木とは接触しなかったが、「もう今夜、あたしたちは危険かと思はれます」と、彼女の口から自身の危機的状況が語られる。彼女のその後については「昨夜は何んでも、芳秋蘭がスパイの嫌疑で仲間から銃殺されたらしいんだが」という山口の話が語られるのみである。

こうして作品に登場した唯一の中国共産党員芳秋蘭は姿を消してしまう。彼女は最初ダンスホールに登場し、その後、日本の内外綿会社に密かに潜り込んでいる女工という身分が明かにされた。そして、何度も暴動の現場に姿を現したが、彼女と群衆との接点は捉えられず、革命家としての彼女のリアリティーは、非常に薄められている。しかも、彼女は組織の中で一体どのような地位にあるのかなどは明確でなく、その革命理念というものも、ただ参木との論争に限られている。革命家としての芳秋蘭は、作品の中で、群衆からも、上海の政治状況からも孤立し、革命家としての存在感が薄く、五・三〇事件との関連も描かれていないと言わざるを得ない。「彼女の革命家としての存在の弱さが神秘的な美女というもう一つの芳秋蘭像によりかかってしまい、参木と芳秋蘭の関係をひどく通俗的なものしていることも確かである」と指摘している通りだと思われる。芳秋蘭は主人公の参木と三度も会い、そして恋の芽生えもあるという筋書は、当時の現実から考えてみれば、やや強引な設定だと言わざるを得ない。そして、芳秋蘭が最後に殺された可能性が高いという結末から、未知なる革命への不信感が暗示され、横光は革命成功への共感を示していない。とりわけ彼女がスパイの嫌疑で殺されたという結末は、敢えて共産党員、革命家の惨めな姿を晒すことによって、変革運動に対する虚無的態度を示しているように思える。作品に登場した唯一の共産主義者のこのような結末は、社会の矛盾の打破や、社会変革に対する横光の個人的な予想が込められているのではないだろうか。

横光のこのような筋書設定は、根本的な革命への無関心からのものだと考えられる。このように、中国人の革命家の描写を通し、横光は革命への悲観的な態度を表明する一方、社会革命というものの空しさを訴えたかったものと考えられる。

3.5 『上海』に現した横光の中国、西洋と日本に対する思い

『上海』では、横光は中国当時の革命に対する悲観的な見方が示される一方、繁栄する上海を背景に中国と日本との関係や東洋と西洋との対立が浮き彫りにされている。特に横光は、東洋の覚醒に関心を寄せると同時に、登場人物の西洋に対する視点を通じて、彼自身の対中国観を描いている。『上海』の中で、横光はアジアにおける中国と日本との関係について考察している。小説では日本帝国主義の上海支配が描かれているが、登場人物の会話からも両国の関係が浮き彫りになる。例えば、参木という人物は、自国の利益を図る日本人の代表として描かれ、中国人に殺されることで日本の外交力を強めようとするナショナリズムを示している。このような心理描写から、当時の日本の軍国主義的思考が反映されていることが分かる。

さらに、建築士である山口の描写を通して、日本の軍国主義が東洋の自立を救う唯一の手段であるとする主張がなされている。山口は日本の南満租借権の延長を東洋の生命を保証するものと解釈し、日本の侵略行動を正当化している。これにより、横光は中国への同情を示すことなく、日本の軍国主義を擁護する姿勢を見せている。横光は『上海』で、東洋と西洋の対立を強調し、五・三〇事件を通じて暴動の矛先を日本から英国に向けることで、東洋と西洋の対立を描いている。主人公の参木が「東洋の支配者」を目指す発言からも分かるように、横光は西洋を東洋から追い出すことを重視している。作品内では、英国

のアジアに対する暴行がいくつか描かれており、中国人が英国の罪を咎めることで東洋が西洋に反発する理由が示されている。

また、甲谷という人物の思考を通して、民族の問題として西洋を標的にする意識が強調されている。甲谷は、中国と日本が西洋に対抗するために連携すべきであり、これからの世界大戦は人種大戦になると述べている。このように、横光は登場人物を通じて、西洋に対する反発と東洋の連携を強く意識していることが分かる。『上海』における横光利一の描写は、中国に対する日本の軍国主義的行動を批判するよりも、それを擁護し、東洋の連携を通じて西洋に対抗することを重視している。彼は日本の軍国主義がアジアを救う唯一の手段であると主張し、中国と日本が連携して西洋に対抗すべきであると考えている。このような視点から、『上海』における横光利一の描写は、中国に対する日本の軍国主義的行動を批判するよりも、それを擁護し、東洋の連携を通じて西洋に対抗することを重視している。横光は、日本の軍国主義がアジアを救う唯一の手段であるとする立場をとっており、中国と日本が協力して西洋の勢力に対抗すべきだと主張している。このような視点は、当時の日本の帝国主義的思考を反映しつつも、東洋全体の自立と覚醒を願う複雑な感情が込められている。『上海』は、その時代の政治的背景と横光の思想を通じて、東洋と西洋の対立や日本の軍国主義に対する見解を深く掘り下げた作品として評価されるべきである。

4. 芥川と横光の比較

芥川龍之介の『上海遊記』と横光利一の『上海』を比較し、1920年代の上海を通じて、日本人作家の目に描かれた上海の印象と日本人の世界観の変化に与えた影響について考察することは、文学研究だけでなく、文化史研究においても重要な位置を占める。本章では、日本人と上海の関係、国際都市としての上海のイメージ、および上海理解の諸相という3つの観点から、両作品を比較分析する。

4.1 日本人と上海の関係

芥川龍之介と横光利一の作品を通じて描かれる1920年代の上海における日本人の姿は、異なる視点とアプローチを持ちながらも、両者の文学的表現が交錯することで、日本人居留民の複雑な感情や社会的関係を浮き彫りにしている。

芥川龍之介の『上海遊記』では、観察者としての芥川が上海での滞在中に感じた日本人居留民の生活や心情を描写している。彼の作品には、入院生活を通じて現地の日本人との交流が記されており、日本人のコミュニティとの関わりや、異郷での日本人としてのアイデンティティが鮮明に描かれている。特に、日本文化の象徴である俳句を詠むことで、彼は故郷への思いや愛国心を表現し続けていた。これにより、芥川は上海での日本人の存在意義を深く考察し、異国での日本人としての自己認識を探求していることがわかる。

一方、横光利一の『上海』では、上海に住む日本人居留民の視点から描かれることが多く、その中で社会的問題や文化的混沌が浮き彫りにされている。横光の作品には、上海という国際都市における日本人の存在がどのように影響を及ぼしているかが描かれており、その中には日本人と現地の人々との間にある緊張や対立が含まれている。彼の描く上海は、単なる異国情緒の場所ではなく、現実の社会問題や文化的矛盾が存在する場として描かれている。横光の作品における日本人と上海の関係は、単なる異文化体験にとどまらず、上海における日本人の立ち位置やその影響力についての深い考察がなされている。彼は、上海における日本人居留民の生活や彼らが直面する問題を通じて、日本人がどのように異文化と向き合い、どのようにその中で自らのアイデンティティを維持しようとするか

を描いている。その中には、異文化に対する理解と同時に、異文化との衝突や矛盾が存在し、それが日本人の世界観にどのような影響を与えているかが示されている。

両者の作品を総合すると、芥川龍之介と横光利一は、それぞれの視点から 1920 年代の上海における日本人の姿を描き出し、異国での日本人のアイデンティティや愛国心、そして社会的関係の複雑さを浮かび上がらせている。芥川は観察者として、個々の経験を通じて異郷での日本人の存在を探求し、横光は居留民の生活を通じて日本社会の一端を上海という都市の中に投影している。これにより、1920 年代の上海を舞台にした日本人の体験が多角的に捉えられ、日本人による上海理解の複雑さと多様性が示されていると考えられる。

4. 2 国際都市としての上海のイメージ

芥川龍之介と横光利一による上海の描写は、国際都市としての上海の多面的なイメージを反映している。芥川の『上海遊記』では、上海が持つエキゾチックな魅力や異文化との触れ合いが強調され、その新鮮な体験や異文化理解の契機としての側面が描かれている。これに対して横光の『上海』では、上海のダークサイド、特に租界や植民地主義のもとで展開される東洋と西洋の対立、西洋文化の浸透がもたらす中国社会および日本人居留民への影響が深く掘り下げられている。

1920 年代から 30 年代にかけては、上海租界の黄金時代にあたる時期と言われ、国際的な都市上海は中国国内において、あたかも坩堝のような特殊な存在となっていた。「世界の縮図」「魔都」などとも称され、西洋と東洋の文化が混ざり合う都市であった。芥川の『上海遊記』にも、横光の『上海』にも、零落した「中国」と先進的な「西洋」が溶け込んだ上海が描かれている。しかし、『上海遊記』や『上海』では、上海の国際的な活気を描きつつ悪の一面も描かれた。上海は豪華を尽くし、各国人が自由勝手な生活を送っている魔の都と呼ばれる游蕩享樂の天国であるように見える。芥川も横光と同様、こうした上海独特のムードを強く感じていたと考えられる。旅人としての芥川と横光が、上海のこのような風紀の乱れた悪の一面を描こうとしていたかどうかはともかく、両者の作品にはともに、享樂都市上海の都市悪が描かれていたのは事実である。

以上のように、国際都市上海は自由で、また享樂の場であったという理解において、芥川と横光は共通している。しかしながら、このような上海のイメージは墮落の街、活力のない街のように受け止められやすいのではなかろうか。特に、『上海遊記』の中では、当時の社会の著名人と会見したといっても、あくまで会話に限られ、外国人の活躍に比べ、中国人の奮闘する姿のスケッチは少ない。あっても、だらしない車屋の姿ばかりである。古典と現実との大きなギャップに失望したため、芥川は上海の中国人の持つ中庸というものをより強調したのかもしれない。横光は芥川と異なり、社会の根底からエネルギーが湧いてくる革命都市としての上海を描いた。横光が「五・三〇事件」を中心に小説『上海』を創作したことは既に指摘しているが、様々な登場人物の視線を通し、事件のきっかけから、三回にわたる暴動を悉く描いた。横光が上海を革命都市という位置づけで考えていたことは十分に読み取れる。

4. 3 上海理解の諸相

横光利一の『上海』と芥川龍之介の『上海遊記』から読み解ける上海のイメージは、両作家の文学的志向と哲学的背景に深く影響されている。芥川が示したのは、自身の内面的探求と外部世界の驚嘆を統合させた上海である。横光は、より政治的、社会的なレンズを通して上海という都市を評価し、その激動する社会状況を鮮明に浮き彫りにした。芥川の

『上海遊記』からは、一人としての異文化体験の意義と自己発見への道が示されており、上海はその旅のキャンバスとなる。対照的に、横光の『上海』は、一個人の運命が大きな歴史的、社会的潮流によっていかに左右されるかを浮かび上がらせている。

芥川と横光の西洋に対する態度はほぼ一致し、同時代の知識人の強い西洋崇拝に比べ、むしろ逆に無関心、或は嫌悪を示した。しかし、そうなる背景を考察すると、それぞれ異なる理由が見える。芥川の場合は、自身の中国への憧憬によるものであり、横光は同時代の日本国内で高まっていたナショナルリズムに深く影響されていたためである。西洋への嫌悪はまた、芥川と横光の革命観などにも直接繋がっていると思われる。

『上海』では、甲谷の目を通し、金融都市としての上海が見事に描かれている。銀貨の流れは上海の街中を流れているエネルギーを意味していると言える。一方、芥川の『上海遊記』には、そのようなエネルギーが湧く上海の姿が見えない。先入観を持ち、中国古典或は日本を意識しながら見聞したため、上海の現実をはっきり把握しきれず、あえて上海の活力のない面ばかりに注目したのではないかと思われる、横光が書き記したのは混沌で暗い掃き溜め都市上海でまたエネルギーに満ち溢れた上海でもある。それに対し、芥川が書いたのは小説のような落ちぶれた上海であり、また西洋の模倣でもある上海である。

以上のことから、それぞれの作家によって、複雑で特殊な都市上海が浮かび上がると言える。このことから、上海は無限の可能性を孕んだ場所と認識できされていたと考えられる。

以上をまとめると、芥川と横光の作品に見る上海理解の諸相は、上海という都市が 20 世紀初頭において日本人に提供した多様な体験、インスピレーション、そして課題を示す鏡とも言える。彼らの上海観は、同じ地に足を踏み入れたものの、時代や個人の置かれた状況によって大きく異なる多様な経験が存在することを物語っている。これらの作品を通じ、読者は異文化交流の豊かさ、国際都市がもたらす可能性と挑戦を、異なる角度から再考することができるだろう。

5. 結論

本研究は、芥川龍之介の『上海遊記』と横光利一の『上海』を比較分析することで、1920 年代の上海を通じて日本人作家がどのようにこの国際都市を描き、日本人の世界観にどのような影響を与えたかを明らかにした。具体的には、以下の 3 点である。

まず、日本人と上海の関係について、芥川と横光の作品を通じて、1920 年代の上海における日本人の姿と彼らの社会的関係やアイデンティティの複雑さを明らかにした。これにより、日本人居留民の感情や異文化との交錯がどのように文学に反映されているかが理解できる。

次に、国際都市としての上海のイメージについて、芥川と横光の描写を通じて、上海が持つ多面的なイメージを浮かび上がらせた。芥川は異文化との触れ合いを強調し、横光は植民地主義の影響や文化的対立を描写することで、上海の国際的な活気と同時にその裏側に潜む社会問題を示した。

さらに、上海理解の諸相について、両作家の文学的志向と哲学的背景から、上海という都市に対する理解がどのように異なるかを分析した。芥川は内面的な探求を通じて自己発見の場として上海を描き、横光は歴史的、社会的な視点から上海を評価し、個人の運命が大きな潮流にどう影響されるかを浮き彫りにした。

しかし、本研究には十分に議論できなかった点がある。まず、芥川龍之介の『上海遊記』には、彼が中国の文人墨客と交流する場面が多く含まれているが、本研究ではその部分について詳細に分析していない。これにより、芥川がどのように中国文化や文人と接触し、

それが彼の上海理解にどう影響を与えたかについての洞察が不足している。また、芥川
の作品に見られる俳句の要素や、日本文化との関連性についても、もう少し詳しく掘り下げ
る必要があるだろう。

次に、横光利一の『上海』には、人間性の刻画や文学的なキャラクターの深層に迫る描
写が多く含まれているが、本研究ではその部分について触れていない。これにより、横光
の作品が持つ文学的な豊かさやキャラクター描写の深さが十分に評価されていない。例え
ば、横光が描く登場人物の心理描写や、彼らが直面する倫理的葛藤など、より深い文学的
考察が必要である。

また、比較の偏りについても考慮する必要がある。芥川と横光の上海描写の比較におい
て、特定のテーマや視点に偏りがある可能性がある。例えば、政治的・社会的な視点から
の分析が中心となっており、文化的・芸術的な側面についての比較が十分に行われていな
い点がある。これにより、上海の多様な文化や芸術活動が日本人作家に与えた影響につ
いての理解が不十分である。

さらに、歴史的背景の詳細な分析が不足している。1920年代の上海という歴史的背景
についての詳細な分析が不足しているため、当時の上海の社会的・経済的状況や国際関係
が両作家の作品にどのように影響を与えたかについての理解が不十分である。この点につ
いて、当時の上海の政治的動向や経済的発展、国際的な交流の状況を踏まえた分析が必要
である。

これらの不足点を踏まえ、今後の研究では、芥川と横光の作品におけるより多角的な分
析を行い、1920年代の上海における日本人作家の視点とその影響について、さらに深く
掘り下げていくことが求められる。具体的には、両作家の他の作品との比較や、当時の上
海に関する他の文献との対照を通じて、より広範な視野からの考察が必要である。また、
文学的・文化的な側面に加え、歴史的・社会的背景を踏まえた総合的な分析を行うことで、
1920年代の上海に対する日本人作家の理解とその影響をより深く解明することができる
だろう。

さらに、多角的な視点から上海理解の複雑さを深掘りし、それが日本文学と国際都市の
関係性に与える影響を探求していくことで、日本と上海の文化的交流が提供する可能性と
課題を深掘りすることが可能になると考える。

参考文献

- (1) 劉建輝 (2000) 『魔都上海—日本知識人の「近代」体験』東京:講談社
- (2) 前田愛 (1992) 『都市空間のなかの文学』筑摩書房
- (3) 栗坪良樹 (1990) 『横光利一論』永田書房
- (4) 戸田民子 (1983-05) 「芥川龍之介「上海遊記」 : 里見病院のことなど」
『論究日本文学』立命館大学日文学会 46, 11-2
- (5) 小川直美 (1986. 12) 『横光利一「上海」—吉行エイスクとの比較において—』
同志社国文学 41-50
- (6) 芥川龍之介 『大川の水』
https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/123_15167.html
- (7) 芥川龍之介 『上海遊記』
https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/51215_56381.html
- (8) 横光利一 『静安寺の碑文』
https://www.aozora.gr.jp/cards/000168/files/56935_57090.html
- (9) 横光利一 『上海』

https://www.aozora.gr.jp/cards/000168/files/50899_42798.html

謝辞

まず初めに、一年間ご指導くださった浜田先生に深く感謝申し上げます。先生の貴重な助言と、日本語の文章に対する細やかなご指摘により、大いに成長することができました。心より感謝申し上げます。

また、一年間共に学んできたユヴァルさんにも感謝の意を表します。ユヴァルさんと一緒に努力し、励まし合うことで、充実した学びの時間を過ごすことができました。

さらに、秋田大学及び大学図書館のサポートにも深く感謝しております。図書館の充実した資料と静かな学習環境のおかげで、研究を進めることができました。

ありがとうございました。